

研究主題

新たな学びを支える教科等指導の工夫

～「21世紀型能力」を育むための様々な言語活動や協働的な学習活動～

目次

第1	研究の概要	4
1	社会的な背景及び関連施策	5
第2	研究の背景とねらい	6
1	研究の背景	6
2	研究のねらい	7
第3	研究の方法	7
1	研究の体制	7
2	研究の経過	7
第4	研究の内容	8
1	研究主題	8
(1)	新たな学びを支えるとは	8
(2)	人間関係を築く力について	9
(3)	様々な言語活動や協働的な学習活動について	9
2	研究仮説	9
3	協働的な学習活動の基本的な考え方	9
(1)	教師の役割	9
(2)	人間関係を築く力を高めるための学習過程例	10
(3)	様々な言語活動や協働的な学習活動を活性化するために	11
4	研究主題に迫るための手だて	12
(1)	他者と話し合う必然性のある課題の設定	12
(2)	コミュニケーションを深めるための個に応じた指導	12
(3)	互いの考えを知るための工夫	12
(4)	自己評価を生かした指導と評価の一体化	13
5	指導事例	14
	国語	14
	社会	18
	算数・数学	22
	理科	26
	外国語活動・外国語	30
第5	研究の成果と今後の取組	34
1	研究の成果	34
2	今後の取組	38
○	参考文献・資料等	38

＜研究の成果と活用＞

1 研究の成果

- (1) 協働的な学習活動の考え方・方法の提案・開発
- (2) 実際の授業での言語活動や協働的な学習活動の具体例の提示

2 研究成果の活用

- (1) 東京都教職員研修センター内の各種研修での活用による普及・啓発
- (2) 都教委訪問での活用による普及・啓発

第1 研究の概要

研究主題 **新たな学びを支える教科等指導の工夫**
～「21世紀型能力」を育むための様々な言語活動や協働的な学習活動～

- ◆グローバル化
- ◆知識基盤社会の進展
- ◆環境問題の深刻化
- ◆情報通信技術の高度化
- ◆我が国を取り巻く状況
- ◆少子高齢化
- ◆エネルギー資源の枯渇
- ◆経済環境の変化

これからの社会では、「伝統や文化を大切にし、高い志や意欲をもつ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓いていくことができる人材」が求められている

育てたい児童・生徒像

主体的に取り組もうとする意欲や多様性を尊重する態度をもち、コミュニケーション能力やチームワークを高める力を備え、豊かな感性や優しさ、思いやりのある児童・生徒

こうした児童・生徒を育てるためには

「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」を身に付けることに加え、
「人間関係を築く力」を高めることが重要

良好な人間関係を築くために必要な態度

他者との関わりに関する態度

協力し合う

助け合う

支え合う

認め合う

励まし合う

自律に関する態度

我慢

寛容

謙虚

変化の激しい社会に対応して求められる資質・能力を育む学習活動を追究

国語、社会、算数・数学、理科、外国語活動・外国語を含めた全ての教育活動

人間関係を築く力を高めるために

これからの学校では、教科等の指導を含めた全ての教育活動において児童・生徒に主体的に活動させ、共に支え合い、高め合う学習活動を通して、「人間関係を築く力」を身に付けさせることが必要です。そのための方法として「言語活動と協働的な学習活動」を行います。

言語活動

本研究では、言語活動を、各教科等の目標を実現するための「思考・判断・表現」を伴う「話す・聞く」、「書く」、「読む」活動全般と定義しました。

協働的な学習活動

本研究では、協働的な学習活動を、「他者と協力して課題に取り組む学習活動」と定義しました。

各教科における授業改善の提案

1 社会的な背景及び関連施策

21世紀は、知識基盤社会の時代であるとともに、グローバル化が一層進展する時代である。世界全体が急速に変化する中であって、産業の空洞化や生産年齢人口の減少など、深刻な諸課題を抱える我が国は、極めて危機的な状況にある。こうした状況は、これまでの物質的な豊かさを前提にしてきた社会の在り方、人間の生き方に大きな問いを投げ掛けている。この問いに答えていくために必要なことは、人々が主体的に社会参画し社会全体で支え合うことであり、一人一人自立した個人が多様な個性・能力を生かし、他者と協働しながら新たな価値を創造していくことができる柔軟な社会を目指していくことである。そのために、人々の多様な個性・能力を開花させ人生を豊かにするとともに、社会全体の今後一層の発展を実現するための基盤を作る役割が教育に求められている。次代を担う子供たちには、変化の激しい社会に適応し、たくましく生き抜いていく力がこれまで以上に求められる。20年後、30年後の社会に生きる子供たちは、これまで我が国が直面したことのない様々な諸問題に対峙することになる。未来を切り拓き、次代を心豊かにたくましく生きる人材を育成していくことは、今日の教育に求められる最も重要な使命である。

また、グローバル化の進展や変化の激しい知識基盤社会の到来を背景に、コンピテンシーを重視した教育改革の世界的な潮流が見られる。コンピテンシーとは、知識だけではなく、スキルや態度を含む人間の能力であり、言語や知識、技術を相互作用的に活用する能力、多様な集団の中での人間関係形成能力、自律的に行動する能力、これらの核となる「思慮深く考える力」等で構成されている。次代を担う子供たちが21世紀をよりよく生きるために必要な資質・能力の育成が、多くの国々で課題となっている。

このような社会的背景の下に、文部科学省は第2期教育振興基本計画（平成25年6月閣議決定）において、「自立（一人一人が多様な個性・能力を伸ばし、充実した人生を主体的に切り拓いていくこと）」、「協働（個人や社会の多様性を尊重し、それぞれの強みを生かして、共に支え合い、高め合い社会に参画すること）」、「創造（自立・協働を通じて更なる新たな価値を創造していくこと）」の三つの方向性の実現に向けた生涯学習社会の構築が必要であるとし、教育基本法に基づき四つの基本的方向性、八つの成果目標、30の基本施策を策定した。四つの基本的方向性の一つとして「社会を生き抜く力の養成～多様で変化の激しい社会の中で個人の自立と協働を図るための主体的・能動的な力～」を掲げ、成果目標として「『生きる力』の確実な育成」、「自立・協働・創造に向けた力の修得」等を挙げている。

また、東京都教育委員会では、都の教育振興基本計画となる東京都教育ビジョン（第3次）（平成25年4月策定）において、「学びの基礎を徹底する」、「個々の能力を最大限に伸ばす」等の取組の方向と「基礎・基本の定着と学ぶ意欲の向上」、「思考力・判断力・表現力等を育成し、時代の変化や社会の要請に応える教育の推進」、「国際社会で活躍する日本人の育成」等の主要施策を示している。

さらに、国立教育政策研究所から出された「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」（平成25年3月）では、21世紀を生き抜く力を「21世紀型能力」とし、「21世紀型能力」を、「生きる力」としての知・徳・体を構成する様々な資質・能力のうち、特に教科・領域を横断的に学習することが求められる能力を汎用的能力として抽出し、それら

を「基礎」、「思考」、「実践」の観点で再構成している。この報告書では、「生きる力を調和的に育む」という理念に今一度立ち返り、「学力」、「人間性」、「健康・体力」という区別を超えて、これらが目指すものを総合的に捉え直し、その上で求められる汎用的能力である「21世紀型能力」を具体化することを目指している。そのため、まず、学力の三要素（①基礎的・基本的な知識・技能、②それらを活用する思考力・判断力・表現力等、③学習意欲）を、それぞれ、「基礎力」、様々な課題を解決するための中核となる能力を「思考力」、その使い方を方向付け、実生活で活用していくための能力を「実践力」と位置付けている（図1）。

学力の三要素における「思考力・判断力・表現力等」は、知識・技能を活用して「課題を解決するための」能力であり、「21世紀型能力」における「思考力」が目指すものと一致しているとしている。この「21世紀型能力」は、今日諸外国で求められている能力観とも一致する部分が多くあり、学校生活全体、全ての教科や領域等を貫いて育てたい資質・能力であり、「生きる力」をより実効性のあるものとするための方向を示している。

なお、「21世紀型能力」における「基礎力」とは「言語、数、情報（ICT）を目的に応じて道具として使いこなすスキル」であり、「思考力」とは「一人一人が自ら学び、判断し、自分の考えをもって他者と話し合い、考えを比較吟味して統合し、よりよい解や新しい知識を創り出し、更に次の問いを見付

ける力」、「実践力」とは「日常生活や社会、環境の中に問題を見付け出し、自分の知識を総動員して、自分やコミュニティ、社会にとって価値のある解を導くことができる力、更にその解を社会に発信し協調的に吟味することを通して他者や社会の重要性を感得できる力」であるとしている。

第2 研究の背景とねらい

1 研究の背景

前述の社会的な背景の下、これからの社会で求められる資質・能力を考えると、子供たちに未来を切り拓き、心豊かにたくましく生きる力を育むためには、発達の段階に応じ、各教科等で目指す力を着実に身に付けさせるとともに、他者とコミュニケーションをとり、他者と協働する力を身に付けさせていくことが大切である。

そこで、本研究では、次代を担う人材の育成を目指し、「人間関係を築く力」や「他者との協力」ができる児童・生徒を教科等の学習を通して育成する方法を開発し、授業による検証を行って、平成24、25年度「教科基礎調査研究」の研究成果を基に、各教科の授業改善に資する指導法等を明らかにするとともに、東京都教職員研修センターの研修内容の充実に資する研究を



図1 21世紀型能力の考え方

行うこととした。

2 研究のねらい

様々な言語活動や協働的な学習活動を組み込んだ授業を行い、教科等の指導において「人間関係を築く力」を高めることを検証し、その内容や方法を指導資料として作成・配布することで普及・啓発を図り、各学校の授業改善を促す。

第3 研究の方法

1 研究の体制

研究を推進するに当たり、研究部会の他に、国語、社会、算数・数学、理科、外国語活動・外国語の5教科等において、教科等部会を組織した。各教科等の授業研究を行うために教科ごとに主幹教諭等の調査委員（小学校1名、中学校1名）を委嘱した。各部会には、統括指導主事、指導主事及び教員研究生が所属した。

研究部会は週に1回程度実施し、基礎研究、開発研究、授業研究等を行った。

2 研究の経過

平成26年4月	第1回 研究部会の発足（週1回）
平成26年4月～平成26年6月	基礎研究
平成26年7月～平成26年9月	協働的な学習活動の基本的な考え方の構想
平成26年10月～平成26年11月	各部会による検証授業の実施
平成26年12月～平成27年1月	検証授業の分析・考察、研究のまとめ
平成27年2月	教育課題研究発表会の実施〔2月17日〕
	演題「次期学習指導要領の改訂を見据えた今後の学校の役割」
	講師 国立教育政策研究所 初等中等教育研究部長
	大杉 昭英 先生
	千葉大学教授 天笠 茂 先生

第4 研究の内容

1 研究主題

新たな学びを支える教科等指導の工夫

～「21世紀型能力」を育むための様々な言語活動や協働的な学習活動～

(1) 新たな学びを支えるとは

研究主題にある「新たな学び」について、本研究では「21世紀型能力を育む学習活動」と定義した。前述したように、「21世紀型能力」は「基礎力」、「思考力」、「実践力」から成る。本研究では、教科等の指導の研究の視点から「思考力」に着目した。「思考力」は、一人一人の児童・生徒が自ら学び、判断し、自分の考えをもって他者と話し合い、考えを比較吟味して統合し、よりよい解や新しい知識を創り出し、更に次の問いを見付ける力である。

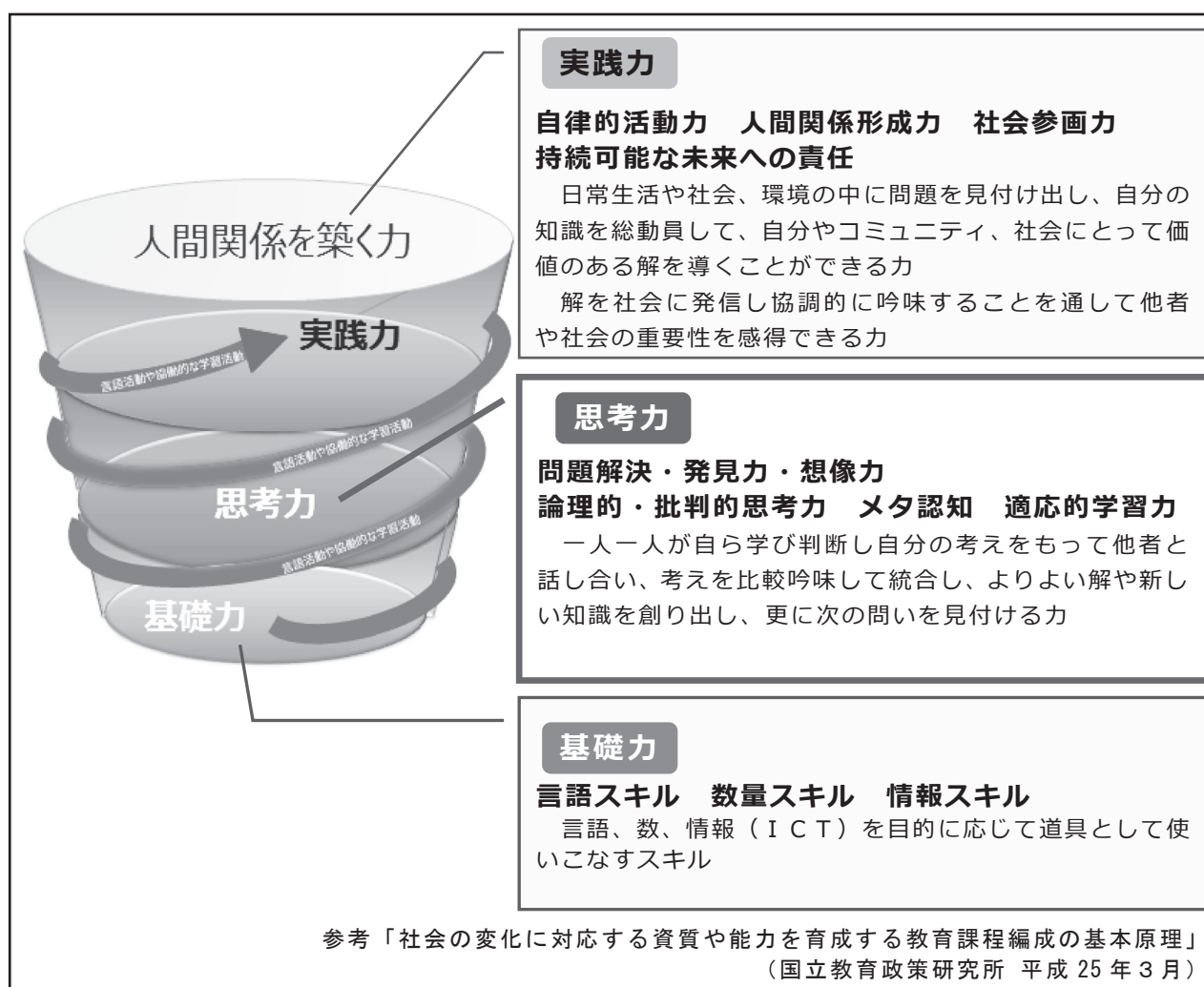


図2 人間関係を築く力の考え方

この「思考力」を育てるためには、「他者と話し合い、考えを比較して統合」する力が必要である。そこで、本研究では、各学校における教科等指導において、「基礎力」を使って言語活動や協働的な学習活動を行うことで、「思考力」や「人間関係を築く力」を高め、「実践力」へ向かわせることができると考えた（図2）。

(2) 人間関係を築く力について

人間関係を築くことに関わる学習活動は、これまでは主に特別活動や道徳などで扱われてきたが、これからは教科等の指導を含めた全ての教育活動において取り組むことが大切である。

児童・生徒は、様々な場面で、答えのない問題や経験したことのない課題に、他者と協働して取り組むことにより、思考力等を高めるとともに、これからの社会の中で必要な「人間関係を築く力」を高めることができる考えた。そこで、本研究では「人間関係を築く力」を高めるため「様々な言語活動や協働的な学習活動」を手だてに取り組むこととした。

(3) 様々な言語活動や協働的な学習活動について

言語活動は、「国語科で身に付けた技能を基に、各教科等の目標を実現するための『思考・判断・表現』を伴う『話す・聞く』『書く』『読む』活動全般」（平成23年度 東京都教職員研修センター 言語活動の充実に関する研究（2年次））と定義した。そして、言語活動で育てる児童・生徒の姿を「言語活動を通して、よく考え、判断して、自分の言葉で表現できる児童・生徒」とした。

また、協働的な学習活動は、「他者と協力して課題に取り組む学習活動」と定義し、協働的な学習活動を行うことで育てられる児童・生徒の姿には、他者とのコミュニケーションをとることにより、以下が見られると考えた。

- ・ 他者の考えを聞いたり話したりすることで、自分の知識や考え方の幅を広げることができる。
- ・ 場や相手に応じて対応できる力を身に付けることができる。
- ・ 自律性・社会性を身に付けることができる。

児童・生徒は、様々な言語活動を行うことで、思考力・判断力・表現力等を身に付けることができる。その力を協働的な学習活動の場で発揮し、他者とコミュニケーションをとりながら課題を解決する。そして、言語活動や協働的な学習活動を通してコミュニケーションを重ねることで、児童・生徒が人間関係を築く力を培っていくことができると考えた。

2 研究仮説

上記を踏まえ、研究仮説を以下のように設定した。

他者と協力して課題に取り組む学習活動を意図的に設定することにより、児童・生徒の思考力を育て、人間関係を築く力を身に付けさせることができるだろう。

3 協働的な学習活動の基本的な考え方

(1) 教師の役割

児童・生徒が主体的に協働的な学習活動に取り組むためには、教師は、児童・生徒の活動を支援する役割を担うようにすることが大切である。教師に必要なことは、協働的な学習活動の計画を立て、児童・生徒の活動を促進するための教材研究を行うことである。また、協働的な学習活動を活性化させるには、「他者と話し合う必然性のある課題」が必要である。

これまで行われてきた話し合い活動は、課題を解決するために話し合うことが多かったが、本研究では上記に加え、「話し合うこと」を社会生活の一部と捉え、人と人との間で知識を伝え合い、自他の考えを生かし合うこと、人間関係を培うことを目指す。そのため、交流する必然性のある課題について話し合うことを通して、他の人の考えに気付き、自分の意見や感想をもたせる

ようにする必要がある。課題を自力で解決することが難しい児童・生徒や話し合いをまとめることができる児童・生徒を同じグループにするなど実態に応じてグループ編成を行うことが大切である。

また、教師は個に応じた指導を計画し、実施する必要がある。その際には、学習の到達状況を評価するだけでなく、一人一人の協働的な学習活動の状況を評価することも大切である。

(2) 人間関係を築く力を高めるための学習過程例

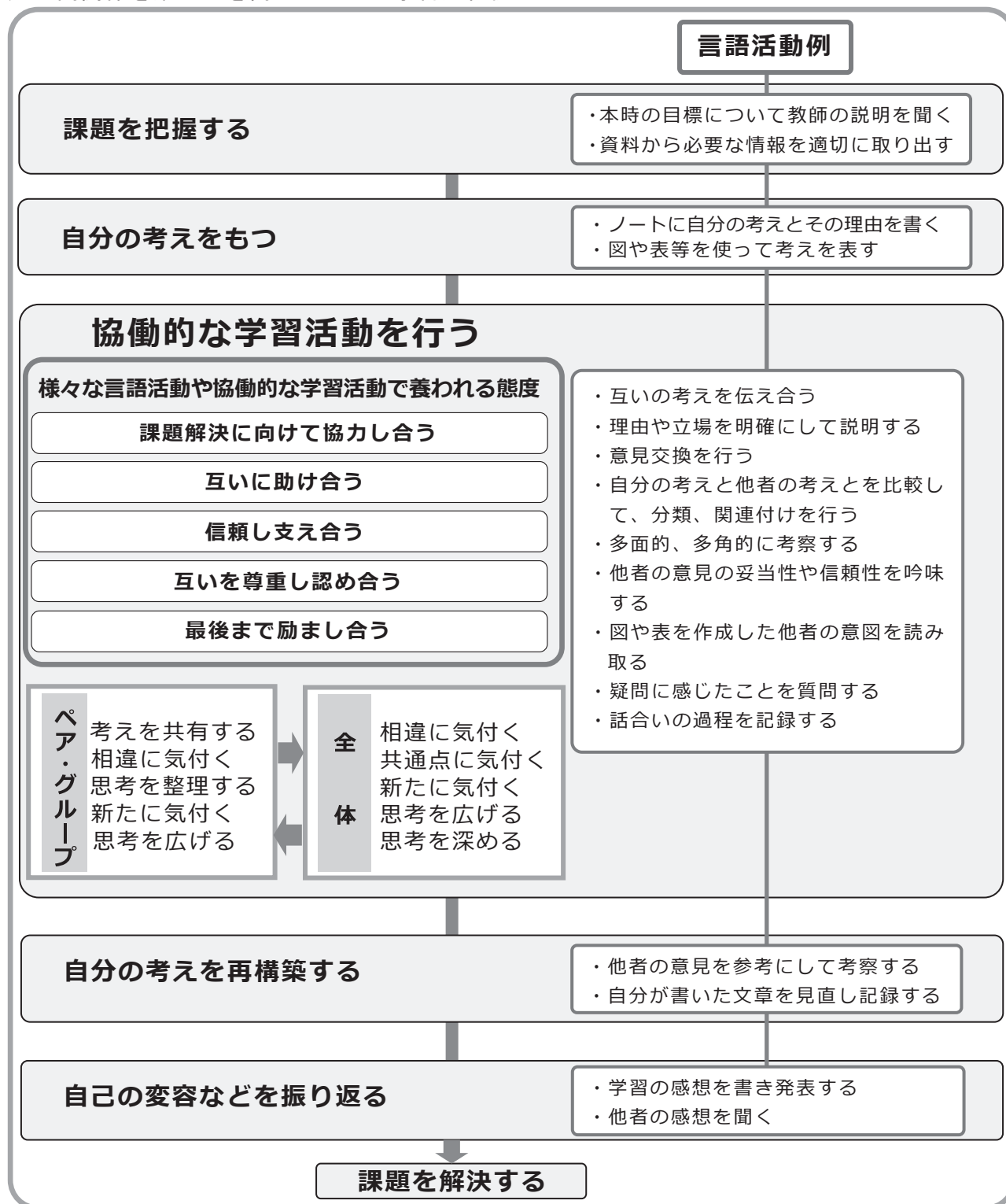


図3 人間関係を築く力を高めるための学習過程例

本研究では、人間関係を築くための学習過程を以下の順序性で捉えた（図3）。

- 1 課題を把握する。
- 2 課題に対する自分の考えをもつ。
- 3 単元や学習活動によって、ペアやグループ、全体での学習形態を組み合わせ、話し合いを行う。
- 4 協働的な学習活動における話し合いを受けて、自分の考えを見直す際、他の児童・生徒の考えを参考にして必要があれば追加したり修正したりする。
- 5 協働的な学習活動を振り返り自己評価を行う。
- 6 課題を解決する。

この学習過程は一単位時間に設定するだけではなく、学習内容や課題に合わせて一単位の中で柔軟に設定する。

(3) 様々な言語活動や協働的な学習活動を活性化するために

前述した学習過程で言語活動を行い、思考力・判断力・表現力等を伸ばし、自分の考えや思いを言語で表現することで、自分の考えをもったり、語彙を豊かにしたりすることなどが考えられる。

そして、協働的な学習活動を行うことで自分の知識を深め考え方の幅を広げ、場や相手に応じて対応できる力や、社会性を身に付けることができると考える。

また、協働的な学習活動では、他者とコミュニケーションをとりながら課題を解決していく。その過程の中で、「課題解決に向けて協力し合う」、「互いに助け合う」、「信頼し支え合う」、「互いを尊重し認め合う」、「最後まで励まし合う」など、コミュニケーションを重ねることで人間関係を築くために必要な態度を培うことができると考える。

協働的な学習活動を効果的に行うためには、グループ編成や座席の配置、話し合う方法の工夫等、学習環境を整える必要がある。

例えば、グループ編成については、学習内容や課題に応じて、人数、メンバー構成、習熟の程度等に考慮する必要がある。また、机の配置、机の有無等によっても話し合いの形態が変わることが考えられる。

上記のような人間関係を築く力を高めたり協働的な学習活動を活性化したりする手だてを考え、検証授業を行い、有効性を確かめていく。



協働的な学習活動（小学校・国語）

4 研究主題に迫るための手だて

協働的な学習活動を活性化するために、下記の具体的な手だてを設定し、各教科等の単元に位置付けることとした。

(1) 他者と話し合う必然性のある課題の設定

協働的な学習活動を有効に行うためには、見いだした課題が正しいかどうかを検討するのか、その解決方法について話し合うのかなど、話し合う目的やその内容を明確にし、「話し合う必然性のある課題」を設定する。

「話し合う必然性のある課題」とは、主体である児童・生徒が「話し合わなければ課題を解決できない」課題であり、「他の人の話を聞いて考えていきたい」等話し合いに対して意欲がもてる課題のことである。教師からの指示を受けてから行動を起こすのではなく、児童・生徒の「話し合いたい」という意欲から課題解決が始まることが大切である。



課題について話し合う（小学校・外国語活動）

(2) コミュニケーションを深めるための個に応じた指導

学級の中には、人と関わり合うことが得意・不得意な児童・生徒が存在する。人と関わり合うことが得意な児童・生徒が話し合いを進めたり、話し合いをまとめたりする役割を担い、人と関わり合うことが苦手な児童・生徒は、相手の話を聞く、うなずく、記録を取るなど、自分ができることを行うようにすることが大切である。

また、人と関わり合うことが苦手な児童・生徒は協働的な学習活動の積み重ねにより、徐々に人との関わりがもてるような目標を設定することも手だての一つであり、各グループの学習活動の状況を注意深く観察し、個に応じた指導を行う必要がある。協働的な学習活動を活性化し、児童・生徒が自ら学習できる力を育成することが、本研究における個に応じた指導の視点である。



自分の考えをまとめる（小学校・理科）

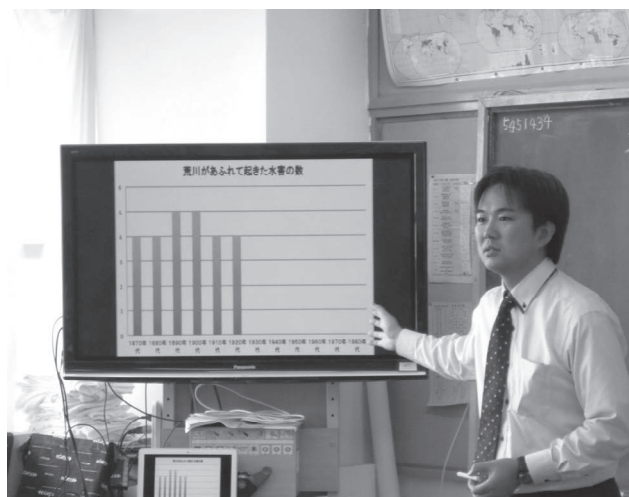
(3) 互いの考えを知るための工夫

協働的な学習活動で大切なことは、「互いの考えを知る」ことである。相手の考えに対して興味をもち、自分の考えを相手に伝えたいという意欲が生まれると、他者と協力して難しい課題



考えをグループでまとめる（中学校・理科）

に挑むなど、学習を主体的に進める原動力とすることができる。課題によってグループの構成（人数、習熟の程度等）や教材・教具を工夫することも重要である。また、ICTを効果的に活用することで、繰り返しの指導や、一人一人の習熟の程度に応じた指導を行うことができる。本研究において、協働的な学習活動や自分の考えをまとめる活動、グループの考えをまとめる活動等でICTを活用し、効果的に学習を進める手だてとした。言語活動の一つである発表、記録、要約、報告等の基礎的・基本的な知識・技能を活用した学習活動においても、ICTを活用することでより充実した学習が実現できると考えた。



電子黒板で説明（小学校・社会）

(4) 自己評価を生かした指導と評価の一体化

協働的な学習活動についての達成度を測るために、児童・生徒の自己評価と同時に教師による評価を行う。自己評価は振り返り（学習感想）と一体化させ、「児童・生徒の問いや理解がどう変化するか」を追跡できる評価とする。また、自己評価を行うことは児童・生徒自身にとっても「学び方を学ぶ」手だてになり、(2)の手だてである「コミュニケーションを深めるための個に応じた指導の充実」につながると考えた。



学習を振り返る（中学校・数学）

自己評価の観点は下の表1のものを例として、教科等部会で検討し、教科等ごとに作成することとした。

1、2、3の段階は協働的な学習活動で「聞く」ことを重視し、4からは、「話す」、「話し合う」ことを重視し、5では「自分の考えを再構成する（見直す）」こととした（表1）。

段階	5	4	3	2	1
協働的な学習活動の評価項目 ※児童・生徒による自己評価	自分の考えと友達のことを比べて聞き、自分の考えを見直している。	自分の考えと友達のことを比べて聞き、類似点や相違点に気づき、相手に意見や質問をしている。	自分の考えと比べて友達のことを聞き、どこまで同じかが分かっている。	自分の考えと友達のことを比べて聞いている。	友達のことを最後まで聞くことができる。

表1 協働的な学習活動の評価項目例

5 指導事例

国語「読んで考えたことを伝えよう『ごんぎつね』」

小学校・第4学年

【本単元の概要】

本単元は、作品「ごんぎつね」を、他者との交流を通して読み深めることをねらいとしている。他者との交流を通して、一人で読んだときに気付かなかった叙述や解釈に触れ、自分の考えを見直す。最終的には、課題について疑問を解決したり、新たな気付きを生み出したりして、物語の世界を読み深める。

1 単元の見込み

場面の移り変わりに注意して、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むことができる。

2 単元の評価規準

国語への 関心・意欲・態度	読む能力	言語についての 知識・理解・技能
<ul style="list-style-type: none"> ・叙述に着目して物語を読み、感じたことや考えたことを進んで話し合おうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読んでいる。 ・文章を読んで考えたことを発表し合い、互いの考えの共通点と相違点を考え話し合うとともに、一人一人の感じ方の違いに気付いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付いている。

3 単元の指導計画（全7時間）

時	学習活動（協働的な学習活動）	言語活動のポイント
第1次	第1時 ○「ごんぎつね」の話を読み、心に残ったことを紹介カードにする学習であることを知る。 ○読んだ感想を発表し合い、学習計画を立てる。	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を読んで、自分の考えを書き、書いた文章を相手に話して伝えること、相手の考えを聞くこと、互いに話し合うことによって、それまで気付かなかった新たな考えに気付き、その考えを生かして文章に書くことなどを行う。
	第2時	
第2次	第3時 ○ごんの人物描写を読み取り、ごんはどんなぎつねかを考える。 ○葬列の場面でのごんの気持ちの変化を読み取る。	<p>協働的な学習活動のポイント</p> <p>他者と話し合う必然性のある課題の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の気持ちを二通り設定し、そのうちの一つを選択するという課題とする。選んだ理由や根拠を他者と交流する際に話し合う観点を絞ることができる。
	第4時 ○兵十に共感を寄せ、つぐないをするごんの行動や、気持ちの変化を読み取る。	<p>互いの考えを知るための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コンピュータの「アンケート機能」を使い自分の考えを選択し、学級内の誰がどの考えを選択したのかを児童自身が確認できるようにする。あらかじめ同じ意見や違う意見の児童を確認し、話したい児童を選んで話し合うことができる。
	第5時 ○加助と兵十の会話を聞くごんの気持ちを、ごんの行動描写から想像して読み取る。 ○ごんの気持ちを読み取り、ごんは兵十に正体を明かしたかったのかを考える。	
	第6時 本時 ○ごんの気持ちを読み取り、ごんの気持ちは兵十に伝わったのかを考える。	
第3次	第7時 ○詳しく読んだ後にまとめの感想（最終感想）を書く。 ○一番心に残ったことを基に「ごんぎつね」の紹介カードを仕上げる。	<p>自己評価を生かした指導と評価の一体化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の達成度を自己評価するだけではなく、児童が次の学習の目標を立てることができるように、評価項目の内容について児童に説明する。

4 本時の学習（第6時）

(1) 特に重点を置いた言語活動のポイント

・根拠を明確にして課題について自分の考えを他者に伝えるとともに、相手の考えを聞いて更に自分の考えを広げたり深めたりし、再び自分の考えを見直すよう指導する。

(2) 特に重点を置いた協働的な学習活動のポイント

□ 他者と話し合う必然性のある課題の設定
 ごんの気持ちを「A 本当のことは知らせなくてよい」、「B 本当のことを知らせたい」という二つの考えから選択させることで、選んだ理由や根拠を明確にして話し合わせる。

(3) ねらい

ごんの気持ちを想像し、なぜそう考えたのかについて叙述を基に理由をはっきりさせて話し合い、考えを深める。

(4) 本時の展開

学習過程	学習活動	指導のポイント
課題をつかむ	1 本時の課題を確認する。 ごんは兵十に栗を届けていたのが自分であることを伝えたかどうかを考えよう	
	2 課題に対する自分の考えを選択肢から選び、理由を書く。 ○二つの選択肢から選ぶ。 A：本当のことは知らせなくてよい。 B：本当のことを知らせたい。 ○そう思った理由を書く。	◆理由を書き出せない児童に対しては、正体を明かしたら、その後ごんはどうなると思うか、「引き合わない」という言葉は、どんな言葉と言い換えられるかなどについて考えさせる。
自分の考えをもつ	3 そう考えた理由について話し合う。 ○Aを選んだか、Bを選んだか、一覧表を全員で確認し、同じ考えの人と違う考えの人を見つける。 ①選択したものが同じで、そう考えた理由も同じ人 ②選択したものが同じで、そう考えた理由は違う人 ③選択したものが違う人	◆個人の読み取りで理由がはっきりしなかった児童は、他者からヒントを得られるようにする。
協働的な学習活動 グループ ↓ 全体	4 話し合いをした上で、再度課題についてAかBを選択し、理由を書く。 5 全体で考えを発表し合う。	◆他者と話し合いをした上でもう一度自分の考えを見直させる。
自分の考えを見直す	6 話し合いについて自己評価を行い、振り返る。 7 話し合いをして、分かったことを発表する。	◆理由について深まった児童や選択そのものが変わった児童に、誰の考えを受けて自分の考えが変わったのかを発表させる。
自己の変容などを振り返る		

検証の成果と課題

◆成果◆

- ・協働的な学習活動は、自分の考えを言葉で表現できない児童に適した活動である。一人で読むより理解が深まった。
- ・他の児童の考えを参考にし、自分の考えを見直せたことが学習後の感想から読み取れる。
- ・協働的な学習活動を行うことによって、多くの児童と話を共有したり話を聞いたりすることができた。

【一単位時間の児童の学習感想】

他の人の意見を聞いて「いわしのおおび」であるという考えに驚きました。そこまで読んでいたのだなと思いました。〇〇さんの意見に納得したので、私もそんな考えが書けたらいいなと思いました。

【単元後の児童の学習感想】

相手とどこが同じでどこが違うのか話し合えてよかったです。達人（自己評価5）までいけてうれしいです。今まで気付かなかったことに気付くことができました。

◆課題◆

- ・自己評価では児童が客観的に自己を振り返ることができず、教師の評価に直接反映することは難しい。参考程度とした上で、児童に自己評価を理解させ、慣れさせる必要がある。

【本単元での検証結果】児童の自己評価が段階に応じて上がった児童の割合・・・87%
 教師の評価が単元前より上がった児童の割合・・・・・・48%

国語「テーマを決めて話し合おう」（討論）

中学校・第2学年

【本単元の概要】

本単元は、相手の立場や考えを尊重し、目的や場面に沿って話し合いが効果的に展開できることと話の内容を的確に聞き取り、適切に話す力を育成することをねらいとする。

単元の流れとして、立論のための論理の組み立て方、その論理を支える根拠となる情報の収集や整理、活用を通して、論理的な思考力・判断力・表現力を育てる。その際、自分の論理を固めるための情報交換と自分の考えを述べる場面に協働的な学習を取り入れる。

1 単元の目標

- 異なる立場や考えを想定して、自分の立場についての意見を論理的に述べている。
- 異なる立場の意見を正確に聞き取り、自分の意見と比較している。
- 相手の立場や考えを尊重し、話し合いを通して自分の考えを広げている。

2 単元の評価規準

国語への 関心・意欲・態度	話す・聞く能力	言語についての 知識・理解・技能
・すすんで話し合いに参加し、発言しようとしている。	・相手の反論を予想し、根拠に基づいて意見を述べている。 ・異なる立場の意見を踏まえて、反論している。 ・異なる立場の意見を尊重して聞いている。	・目的や場の状況に応じて適切な言葉を使っている。

3 単元の指導計画（全4時間）

時	学習活動（協働的な学習活動）	言語活動のポイント
第1次	第1時 ○学習の目標を知る。 ○意見の述べ方、反論の仕方についてワークシートを用いながら理解する。 ○意見の述べ方、反論の仕方の練習をする。	・聞き手が納得できるように自分の考えを伝えることや、人の意見を自分の意見と比べながら聞くこと、質疑応答することで自分の意見を修正する。
	第2時 ○テーマと自分の立場を確認する。 ○テーマ及び討論する相手と自分の立場を決める。 ○テーマに関して情報収集を行う。	・この学習を通して、伝え合うことの楽しさや多様な考えを知る楽しさに気付かせる。
	第3時 ○自分の意見をワークシートにまとめる。 ○相手の意見の根拠を予想し、質問や反論を準備する。 ○相手の反論を予想し、それに対する答えを準備する。	協働的な学習活動のポイント 他者と話し合う必然性のある課題の設定 ・討論のテーマは、生徒にとって、身近な話題や体験、経験したことがある話題等から設定し、話しやすい内容にする。そのことで、他者との話し合いが深まり、自分の知識や考え方の幅を広げ、自分の考えを説得力のあるものにすることができる。
	第4時 ○討論を行う。 ○討論の授業を振り返り、感想等をまとめる。 ○自分の討論の論立てや内容を振り返る。 ○討論の学習を振り返り、自己評価し学習感想をまとめる。	互いの考えを知るための工夫 ・第2時から第4時における学習活動は「情報収集→整理・分析→まとめ・表現」の活動に応じて新聞やインターネットから情報収集を行うことで、自分の意見の客観性を高めさせる。 自己評価を生かした指導と評価の一体化 ・毎時間、自己評価と学習感想の時間を十分に確保する。 ・毎時間の始めに自己評価で書いた内容を紹介し、目的意識をもたせる。



協働的な学習活動

4 本時の学習（第4時）

(1) 特に重点を置いた言語活動のポイント

- ・ 討論とはどのような話し合いであるかを導入時に学習して、意見の述べ方や、聞き方、反論のポイントを示す。
- ・ メモを取りながら相手の意見の根拠（理由）を聞き取らせるようにし、そのメモを基にして、次の討論のための作戦を考えさせる。

(2) 特に重点を置いた協働的な学習活動のポイント

- **コミュニケーションを深めるための個に応じた指導**
自分の意見の根拠を考える学習、相手の反論を予想し討論に役立てる学習をする際に、同意見の生徒で構成する少人数グループを設定する。

(3) ねらい

異なる立場や考えを想定して、自分の立場の意見を明確に述べるができる。

(4) 本時の展開

学習過程	学習活動	指導のポイント
課題を把握する	1 本時の課題を確認する。	異なる考えを想定して、自分の意見を明確に述べよう
	2 討論の方法や注意点を確認する。	
自分の考えをもつ	《第1時～第3時で実施》 (討論テーマ例) ① 中学生の服装は私服と制服のうちどちらがよいか。 ② 24時間営業店舗はある方がよいか、ない方がよいか。	
	3 討論を行う。 ・ 第一組の討論を行う。(討論6分)(作戦4分) ・ 第二組の討論を行う。 ・ 第三組の討論を行う。	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>● 第一組</p> <p>● 第二組</p> <p>● 第三組</p> </div> <div style="display: flex; flex-direction: column; gap: 10px;"> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> </div> </div>
協働的な学習活動 グループ ↓ 全体		
自分の考えを再構築する	4 自分の討論の論立てや内容を振り返る。	
自己の変容などを振り返る	5 討論の学習を振り返り、自己評価を行い、学習の感想を書く。	

検証の成果と課題

◆成果◆

- ・ 人との関わり合いがあることで生徒自身の意欲が高まることにつながった。
- ・ 学習を通して互いのよさを知り、互いの考えていることを理解するよい機会になった。
- ・ 振り返りの時間を十分確保することにより、生徒の変容を評価カードで確認することができた。

【一単位時間の生徒の学習感想】

- ・ あまり意見が言えず、相手の意見を素直に受け入れ過ぎた。
- ・ 意見は出し合えた。

【単元を通しての生徒の学習感想】

- ・ ○○さんとペアで話し合い、チームワークよくできた。
- ・ 同じ意見の人や違う意見の人と話ができ、様々な考え方があったことが分かった。

・ 生徒は自己評価を客観的に付けていた。生徒の中で「評価1でも悪いことではない」というつぶやきがあり、自己評価や振り返りは生徒自身意識して学習していた。

生徒の自己評価が段階に応じて上がった・・・81% 教師の評価が上がった・・・74%

教師の評価と生徒の自己評価が一致した・・・52% 教師の評価も生徒の自己評価も上がった・・・67%

◆課題◆

- ・ 日頃の学習で生徒が話し合う方法を身に付けないと主体的に学習を進めることは難しい。また、話し合いに時間がかかるので指導者側で柔軟に計画を変更する必要がある。

社会「郷土の発展に尽くす～青山士と荒川」

小学校・第4学年

【本単元の概要】

青山士の働きで開削された荒川放水路によって洪水の被害が減少し、地域社会の人々の生活が向上してきたことを調べることを通して、先人の郷土の発展に尽くした姿の意味を考える。また、青山士の業績である施設等が現在も地域に存在していることを確認し、水害を心配せずに安心・安全な生活へとつながっていることを考え、表現できるようにする。

1 単元の目標

洪水に悩まされた人々の生活、荒川放水路建設に尽くした青山士らの工夫や努力について調べ、郷土の生活の変化やその発展に尽くした人々の思いや願いについて考えるようにする。

2 単元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての 知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> 地域の発展に尽くした先人の働きに関心をもち、意欲的に調べている。 地域の人々の生活の歴史的背景や地域社会の発展を願ってきた人々の生き方に関心をもち、地域社会のよりよい発展を考えようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の発展に尽くした先人の働きについて学習問題や予想、学習計画を考え、表現している。 地域の人々の願いや生活の向上と、先人の働きやその苦心とを関連付けて考え適切に表現している。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の発展に尽くした先人の働きについて地図や年表、映像資料、文章資料等から必要な情報を読み取ったりまとめたりしている。 調べたことをワークシートや作品、手紙にまとめている。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の発展に尽くした先人の働きを理解している。 地域の人々の生活が変化し、向上してきたのは、先人の願い、努力や働き、苦心によるものであることを理解している。

3 単元の指導計画（全 11 時間）

時	学習活動 (協働的な学習活動)	言語活動のポイント
第 1 時	○明治時代に起きた洪水の被害について聞き、当時の地域の人々の生活に関心をもつ。	<ul style="list-style-type: none"> 話し合いでは、児童が具体的な事実を多く記述している場合には、「つまり」、「まとめると」、具体性の少ない記述をしている場合には、「例えば」という言葉を使って考え、表現するよう指導する。 話し合いの目的に応じて、グループの編成人数を変える。 ペアで話し合う … 自分の意見を話しやすい環境で話す。 グループで話し合う … 複数の意見を聞き、自分の考えを深める。課題の答えとしてよりよいものを考える。 全体の場で発言する … 自分の意見をクラス全体に発表する。
第 2 時	○ある時期から洪水の被害がなくなったことから、学習問題を見いだす。 ・予想し話し合う活動	
第 3 時	○学習問題解決のための学習計画を立てる。	
協働的な学習活動のポイント		
第 4 時 ～ 第 8 時	○学習問題を解決するためにテーマごとに分かれて調べる。 ・グループで調べる活動	<p>他者と話し合う必然性のある課題の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童の問題意識から学習問題を設定して、調べる際には学習問題に立ち返るようにする。主な工事に携わった人々について幾つかの立場に分かれてグループで調べ、それを基に話し合いを設定する。教師は話し合ったことを発表する手法を先に伝え見通しをもたせる。 青山士や、荒川放水路に関わる年表を作成することで、調べていることがどの時期に行われたことか考えられるようにする。
第 9 時 本時	○荒川放水路に関わった人の姿から、放水路の価値を考える。 ・調べたことを基に発表して考える活動	<p>コミュニケーションを深めるための個に応じた指導</p> <ul style="list-style-type: none"> 調べた内容をワークシートで確認し、次の時間の調べ学習に関わるアドバイスを一人一人に伝える。振り返りで書いたものを基に形成的な評価を行い、次時の話し合いに生かす。
第 10 ・11 時	○学習問題に対する自分の考えをまとめ、学習に関わった人に、分かったことや考えたことを伝える手紙を書く。	<p>互いの考えを知るための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> 導入の資料提示の段階では電子黒板を活用し、一部分を拡大したり隠したりする操作を行うことで、児童の多様な考えを引き出せるようにする。 <p>自己評価を生かした指導と評価の一体化</p> <ul style="list-style-type: none"> 協働的な学習活動における児童の能力の達成度を自己評価させると同時に教師も同じ項目で評価を行う。自己評価は振り返りと一体化させ、変容について継続して評価できるようにする。 この自己評価を行うことにより、話し合いの重要性を認識させる。

4 本時の学習（第9時）

(1) 特に重点を置いた言語活動のポイント

- ・荒川放水路建設工事に関わった人について、それぞれ別々の立場について調べたことを基に考えを紹介し合い、互いの考えに意見を言う。
- ・自分の考えを記述する際に、具体的な事実を多く記述している場合には「つまり」、「まとめると」、具体性に乏しい記述をしている場合には、「例えば」という言葉を使って考え表現するよう指導する。

(2) 特に重点を置いた協働的な学習活動のポイント

- 他者と話し合う必然性のある課題の設定
ロールプレイによる発表をすることで、人の思いや願いについて話し合う必然性をもたせる。
- 互いの考えを知るための工夫
これまでの学習を振り返り、意欲的に考えられるように、導入の資料提示で電子黒板を活用する。課題に応じて一部分を拡大したり、部分的に見せたりする操作を行う。

(3) ねらい

青山士、水害に悩まされた人々、工事に参加した作業員、立ち退いた人々等、様々な立場から荒川放水路の完成を祝う場面の気持ちを話し合うことで、荒川放水路の価値について考える。

(4) 本時の展開

学習過程	学習活動	指導のポイント
課題をつかむ	1 荒川放水路にはどのような人々が関わっていたかについて発表する。	◆荒川放水路に関わった人の思いに着目させるため、ICTを活用して学習内容を振り返らせる。
自分の考えをもつ	荒川放水路が完成したときの人々の思いや願いについて考えよう	
協働的な学習活動グループ全体	2 課題に対する自分の考えと、その理由を書く。 ○水害に悩まされた人々等の立場を想定し、自分が考えた理由を書く。	◆理由が思い付かない児童に対しては、自分が調べたことを振り返らせ、そこから探すように指示する。 ◆違う立場から考えるよう個別指導する。
	3 考えた理由について話し合う。 ○これまで、自分で調べた資料を活用しながら、話し合う。 ○話し合ったことをロールプレイで発表する。	◆個人での調べ学習の結果、理由がはっきりしなかった児童は、他者からヒントを得られるようにする。
自分の考えを見直す	4 話し合いをした上でもう一度課題について意見を書く。	◆他者との話し合いの後に、碑文を参考にしてもう一度自分の書いたものを読ませる。
自己の変容などを振り返る	5 話し合いについて自己評価を行い、振り返る。	◆相手を意識させるため、理由について書き加えるときには、誰のどの考えで変わったのか書かせる。

検証の成果と課題

◆成果◆

- ・「青山士はどのようにして荒川放水路を作ったのか」という問いに対し、一人一人の児童の興味・関心から調べ、グループで話し合い、全体で意見交換したことで、関わった人の様々な立場に触れて考えることができた。別の立場に触れて考えることで、これまでの自分の考え方に広がりが見られた。

【児童の反応】

青山さんはずっと立ち退きをした人、水害に悩まされた人、働いた人のことを忘れなかったのがすごいなあと思いました。立ち退きをした人の苦しさがあったり、働いた人が死んでしまったりしたこともありました。岩淵水門はパナマ運河で働いていたことを生かして、苦勞して作ったことを知りました。荒川放水路ができて洪水がなくなり、とてもありがたいと思っています。

- ・他者と話し合うことで自分の考えがまとまり、自分の生活・地域につながる考えが見られた。

【児童の記述】（単元を通して）

青山さん、そして、立ち退いた人、仕事を手伝った人のおかげで今水害がなくなっています。20年間かけて作ったおかげです。私は20年かけてでも、青山さんは岩淵水門を作りたかったんだと思います。それほど人々を助けたかったんだと思います。洪水から人々を守るために作ったこの川を、大切にしていきたいと思いました。

- ・自己評価指標で肯定的な反応が増えた。相手を意識してうまく伝えられた4以上の児童は、第11時が終わった段階で88%であり、当初と比べ、30ポイント増加した。

◆課題◆

- ・同じテーマを調べたグループの構成人数は12人、話し合いは4人、6人とした。話し合いは活発に行われる姿が見られたが、調べ活動と話し合い活動等、活動によって適した人数を考える必要がある。
- ・根拠資料が多いと、テーマに沿った話し合いが難しいので、資料に関しては決められた時間の中で話し合いに当てる分量を考慮するとともに、活用する資料を段階的に増やす必要がある。

社会「江戸幕府の成立とその特色」

中学校・第2学年

【本単元の概要】

江戸幕府の特色を多面的・多角的に捉え、理解させるために、協働的な学習を展開する。幕府の将軍という立場に身を置かせ、幕府を安定させるための取組を考えさせていく過程で、政治・経済の特色について他の大名や農民の立場等からも考えさせる。将軍の立場から幕府の取組を調べ考えさせることで、当事者意識をもたせ、焦点や脈絡をもった自分なりの言葉で江戸幕府の特色を表現させることができる。

1 単元の目標

江戸幕府の政治的な特色を考えさせ、幕府と藩による支配が確立したことを、江戸幕府の成立と大名統制、鎖国政策、身分制度の確立及び農村の様子学習を通して理解できるようにする。

2 単元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての 知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> 近世社会の基礎や幕府と藩による支配の確立、江戸幕府の政治的特色、鎖国の完成、近世の歴史的事象に対する関心を高め、意欲的に追究し、近世社会の特色を捉えようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 近世社会の基礎や幕府と藩による支配の確立、江戸幕府の政治的特色などを多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。 学習した内容を活用し、比較や関連付けを行い、近世社会の特色を多面的・多角的に考察し、公正に判断して、その過程や結果を適切に表現している。 	<ul style="list-style-type: none"> 江戸幕府の成立、身分制度の確立、江戸幕府とそれまでの幕府の違いなど、近世の政治や社会に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して読み取り、まとめている。 	<ul style="list-style-type: none"> 江戸幕府の成立により近世社会の基礎がつけられたこと、幕府と藩による支配が確立したことを、江戸幕府の特色と中世までの幕府との違いを理解し、その知識を身に付けている。

3 単元の指導計画（全6時間）

時	学習活動 (協働的な学習活動)	言語活動のポイント
第1時	<ul style="list-style-type: none"> これまでの武家政権と比較して、江戸幕府が長く続いたことを把握し、過去の武家政権崩壊の原因を振り返る。 これまでの学習を振り返る活動 	<ul style="list-style-type: none"> 考えを伝え合い、互いの考えに意見を言ったり、幾つかにまとめる活動を設定したりすることで、各時代の武家社会の支配構造を、側面や立場などを変えて多面的・多角的に考察させる。他者の意見や考えを参考にさせ、よりよい意見にさせる。
協働的な学習活動のポイント		
他者と話し合う必然性のある課題の設定		
第2時	<ul style="list-style-type: none"> 幕府の将軍の立場で、自己の対抗勢力となりうる立場とその勢力に対する対応を予想する。 予想し話し合う活動 	<ul style="list-style-type: none"> 過去の武家政治の支配構造と崩壊の原因を分析させる。崩壊を回避するための政策について話し合わせる。自分たちが話し合った解決策と江戸幕府の政策を比較させることで、江戸幕府の政治について、当事者意識をもちながら理解できるようにする。
コミュニケーションを深めるための個に応じた指導の充実		
第3時 第4時 第5時	<ul style="list-style-type: none"> 江戸幕府の政策を様々な資料から調べる。(対大名・対農民・対外国など) 調べる活動 	<ul style="list-style-type: none"> 意見を言いやすい環境をつくり、話し合いに参加させる。「2人の相談」、「4人の話し合い」、「6人での発表」など様々なグループ形態による話し合いを行わせ、参加機会を増やす。話し合いにより、考えを深めるとともに、知識の定着を図る。比較しやすいように、関連資料を併記した補助プリントを準備し配布する。
互いの考えを知るための工夫		
第6時 本時	<ul style="list-style-type: none"> 江戸幕府が長期政権となった要因を、話し合いにより一つか二つに絞り込み、そう考えた理由とともに発表する。 調べたことを基に、要因を考える活動 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の興味・関心を高めるため、注目させたい資料を提示して、話し合いの充実を図る。また、発表の際には、自分たちの主張の根拠となった資料を電子黒板で提示させる。
自己評価を生かした指導と評価の一体化		
<ul style="list-style-type: none"> 単元の導入で、長期安定政権を確立した理由を考えさせるために、これまでの学習を振り返らせる。単元の終末では、本小単元で調べたことを加えて振り返る時間を設定する。 学習内容と協働的な学習に関する指標等により自己評価を行わせることで、話し合いを積極的に行う環境を整える。 		

4 本時の学習（第6時）

(1) 特に重点を置いた言語活動のポイント

・他者の意見を参考にして、自分の意見を多面的・多角的に振り返る場面を設定する。武家社会の支配構造について調べたことを基に話し合わせ、経済的側面や農民の立場などから考えさせる。

(2) 特に重点を置いた協働的な学習活動のポイント

□ コミュニケーションを深めるための個に応じた指導
意見を言いやすい環境をつくり、話し合いに参加させる。考えの深まり、知識の定着のため、「2人の相談」、「4人の話し合い」、「6人での発表」など、学習過程によりグループの構成人数を変えて話し合いを行わせ、参加機会を増やす。

(3) ねらい

これまでの幕府と江戸幕府を比較し、安定政権につながった要因を考えることができる。

(4) 本時の展開

学習過程	学習活動	指導のポイント
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">課題を把握する</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">自分の考えをもつ</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">協働的な学習活動グループ全体</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">自分の考えを再構築する</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">自己の変容などを振り返る</div>	1 江戸幕府の支配構造における、大名や農民などの立場の違いを確認する。	◆江戸幕府が政策上、重視した人々の立場に着目させる。
	江戸幕府が、長く続いた要因を考え、話し合った結果を発表しよう	
	2 課題に対する自分の考えをもち、理由を書く。 ○大名、農民、外国人などの立場を想定し、自分の考えの理由を書く。	◆理由が思い付かない生徒に対しては、自分が調べたことを振り返らせ、そこから理由につながることを探させる。 ◆経済面・政治面などの側面、様々な立場から見る意識がもてるように、個別に声を掛ける。
	3 考えた理由について話し合い、グループの考えをまとめ発表する。 ○これまで、自分で調べた資料を活用しながら理由を話し合い、グループの考えをまとめる。 ○三つのグループが前に出て、グループの意見を順番に発表する。	◆個人での調べ学習で理由がはっきりしなかった生徒は、他者からヒントを得られるようにする。 ◆圧倒的な経済力、軍事力のある江戸幕府と、それにより統制された地方の統治者である大名の姿を明確にした意見を紹介する。
	4 話し合いをした上で、もう一度課題について意見を書く。	◆他者と話し合いをした上で、もう一度自分の考えを読み直させる。
5 話し合いについて自己評価を行い、学習を振り返る。	◆考えた理由を書き加えることができた生徒に、誰のどの考えで変わったのかを書かせることで相手を意識させる。	

検証の成果と課題

◆成果◆

・「なぜ江戸時代が長く続いたのか」という問いに対して、各々の生徒が自分の考えた側面や立場から調べ、グループで話し合い、全体で意見交換したことで、多面的・多角的に考えさせることができた。さらに、資料活用を促し、根拠となる知識をより確かにした。

【生徒の記述】

私は江戸幕府が安定した理由は、様々な仕組を作ったことにあると思います。私のグループはその仕組として武家諸法度や土農工商を挙げましたが、他のグループの発表にあった参勤交代で、あまり親しくない遠くの人にお金をたくさん使わせるというのは、なるほどと思いました。大名の配置も、親しい人をうまくはさんでいて、鎖国で外国の干渉を防ぐことにもつながっていくことが分かりました。こうした仕組を多く、上手に作ることで反乱も防げたのだと思います。

・学習のまとめとして、グループの考えを全体発表することを示すことで、それぞれの習得した知識を活用して、多くの生徒がグループの中で積極的に話し合うことができた。

【生徒の様子】（4人グループでの話し合い）

（資料を見ながら）「直属軍2万人は、多いのか、少ないのか。」、「たったの2万人だ。」、「学校の生徒が約500人だから、大名一人で支配されるよ。」、「2万人、すごいじゃない。」、「直属軍を(要因に)選んだ理由は何か。」、「強いから。」、「逆らえないということだよ。」、「そういうことだね。」、「直属軍のお金は」…

・自己評価では肯定的に受け止める生徒が多く、当初から話し合う素地ができていた。相手を意識してうまく伝えられた4以上の生徒は、第6時が終わって66%であり、当初と比べ、17ポイント増加した。

◆課題◆

・多くの生徒が積極的な関わり合いをもてたが、更にねらいに迫るための手だてを必要とする生徒もいた。全体発表の表現力や、話し合いの内容や時間を配分する力は、すぐに身に付かない生徒もいるので、繰り返し指導が必要である。

算数「面積の求め方」

小学校・第4学年

【本単元の概要】

本単元では、面積について、単位と測定の意味を理解し、長方形及び正方形の面積の求め方について考え、それらを用いて面積を求めることができるようにすることをねらいとしている。また、それまでの量と測定領域の学習と同様に、単位の何個分かで数値化して表せること、辺の長さを用いて計算によって求められることなどのよさに気づき、身の回りの面積を進んで求めようとする態度の育成をねらいとしている。

1 単元の目標

面積について単位と測定の意味を理解し、面積を計算によって求めることができるようにするとともに、面積についての量感を豊かにする。

2 単元の評価規準

算数への関心・意欲・態度	数学的な考え方	数量や図形についての技能	数量や図形についての知識・理解
・面積の公式の有用性に気づき、身の回りにある長方形や正方形の面積を求めるのに、すすんで公式を用いようとしている。	・面積を比べるときに、単位の大きさを決めてその何個分かを数値化して考え表現したり、そのことから考えを深めたりしている。	・長方形、正方形の面積を、公式を用いて求めるなどの技能を身に付けている。	・長方形、正方形の面積を求める公式を理解している。

3 単元の指導計画（全 10 時間）

時	学習活動（協働的な学習活動）	言語活動のポイント
第1次	第1時 ○面積の比べ方をいろいろな方法で考える。 ・日常生活の中で面積を意識する場面を取り上げ、比べ方などを話し合うことを通して、面積についての興味・関心を高める。	・発表や説明をするための「話し方」を学級全体で作成し、言語活動を主体的に行えるようにする。
	第2時 ○面積の単位「平方センチメートル（ cm^2 ）」を知り、面積の意味について理解する。	協働的な学習活動のポイント
第2次	第3時 ○長方形、正方形の面積を計算で求める方法を考える。 ・公式を用いて長方形や正方形の面積を求める。	他者と話し合う必然性のある課題の設定 ・話し合う場合は、解いている問題の解が正しいかどうかを検討するのではなく、その解決方法の利便性やよさについて話し合わせる。また、児童に課題を提示する場合も、その時間に児童が取り組むべき活動の目標を明確に示す。
	第4時 ○公式を用いて長方形や正方形の面積を求めたり、辺の長さを求めたりする。	
	第5時 本時 ○既習の長方形や正方形の面積の求め方の学習を活用して、長方形を組み合わせた図形の面積の求め方を考える。 ・長方形を組み合わせた図形の面積を、分割したり補ったりするなど、いろいろな考え方で求める。 ・自分の考えを図や式などを用いて説明するとともに他者の発表からいろいろな考え方を知り、新しい考えに気付いたり、自分の考えを深めたりする。	
第3次	第6時 ○「平方メートル（ m^2 ）」の単位を知り、平方メートル（ m^2 ）と平方センチメートル（ cm^2 ）の面積の単位の間関係を理解する。	自己評価を生かした指導と評価の一体化 ・協働的な学習活動における能力の達成度を児童が自己評価すると同時に、教師も同様の項目で児童を評価する。自己評価は振り返りと一体化させ、「児童の問いや理解がどう変化するか」が確認できる評価にする。
	第7時 ○辺の長さがメートル（ m ）の場合も、長方形や正方形の面積の公式が適用できることを理解する。	
	第8時 ○面積の単位「アール（ a ）」、「ヘクタール（ ha ）」、「平方キロメートル（ km^2 ）」を知り、面積の単位の間関係を理解する。	
第4次	第9時 ○学習内容を適用して問題を解決する。 ・算数的活動を通して理解を深め、面積についての興味を広げたり、面積の大きさについての感覚を豊かにしたりする。	
	第10時 ○学習内容の定着を確認するため、練習問題を問く。	

4 本時の学習（第5時）

(1) 特に重点を置いた言語活動のポイント

- ・求めた面積の値が正しいかどうかと同時に、より効率的に求める方法などについて、その工夫や考えを式や言葉で表現させる。また、それぞれの解決方法のよさについて話し合うことを明確に指示する。
- ・話し合いでは、どの式とどの図形が対応しているのかが分かるように補助線を引いたり、矢印や記号で示したりして説明するよう助言する。

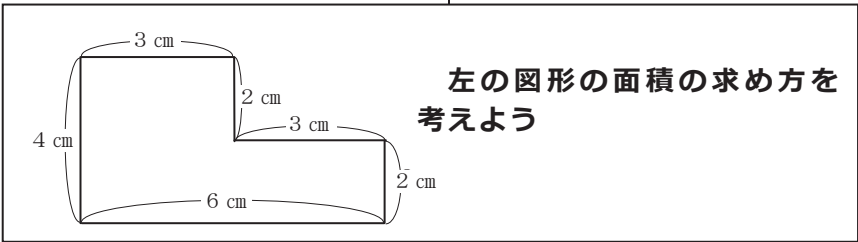
(2) 特に重点を置いた協働的な学習活動のポイント

- コミュニケーションを深めるための個に応じた指導
グループによる話し合いの前に、ペアによる話し合いを取り入れ、その後のグループの人数を3～4名程度とすることで、一人一人が自分の考えを発表する機会を確保する。

(3) ねらい

既習の長方形や正方形の面積を求める学習を活用して、長方形を組み合わせた図形の面積の求め方を考え、面積を求めることができる。

(4) 本時の展開

学習過程	学習活動	指導のポイント
課題をつかむ	1 本時の課題を確認する。 	
自分の考えをもつ	2 自分なりの求め方を考え、考え方をノートに記述する。次に、考えた解決方法をペアで話し合い、解決方法の確認をする。	◆自分の考えがもてない児童には、教師が助言したり、ペアの相手が教えたりする。
協働的な学習活動グループ全体	3 グループで話し合い、考え方を広げたり深めたりする。話し合いの過程で、等積変形や倍積変形の考え方のよさに気付き、既習の公式を使って複合図形の面積が求められることに気付く。	◆グループでの話し合いでは、自分の考えを高めたり、新しい考え方に気付いたりできるように適切な助言を行う。
自分の考えを見直す	4 それぞれの考え方の共通点を探し、複合図形の面積の求め方を考える。	◆既習事項を活用することのよさに気付かせる。
自己の変容などを振り返る	5 話し合いをして分かったことを発表する。 6 話し合いについて自己評価を行い、振り返る。	◆解法が正しいかよりも、それぞれの考え方のどのような点がよいのかに着目させ、発表させる。

検証の成果と課題

◆成果◆

- ・他者のアイデアから正解を導き出すことや、話し合いの中で、自分の考えを深めることができるようになってきた。
- ・これまで話し合いに積極的に参加できなかった児童も、その発想を周囲の児童から認められ、称賛されることで、自信をもって発言できるようになってきた。

【一単位時間の児童の発言】

- ・共通点を確認しながら「縦に分けるやり方が同じだね。」
- ・グループによる話し合いで自分のノートを差しながら「私は横に切って分けたよ。」
- ・「ぼくは大きい長方形から、6cm²（補った部分）をひいたよ。」グループで唯一の解法を考え出したことについては、周囲の児童から「そうか。」「すごい。」など他者のよさを認める発言があった。

◆課題◆

- ・3～4名のグループによる話し合いは、全体よりも一人一人の話す機会が確保できる一方で時間がかかる。そのため、ペア、グループ、全体という学習形態を学習活動に意図的に位置付ける必要がある。
- ・公式など、決まったものを技能として指導する時間は、児童の自己評価が低い傾向にある。技能を身に付けさせる場面では、協働的な学習活動を取り入れるに当たり、協働的な学習活動の内容や目的をより一層明確にして児童に示す必要がある。

数学「三平方の定理」

中学校・第3学年

【本単元の概要】

「三平方の定理」は、中学校数学の図形分野最後の単元である。第1学年の「平面図形」、「空間図形」、第2学年の「図形の性質の調べ方」、「三角形・四角形」、第3学年の「図形と相似」、「円」を踏まえた学習となる。本単元では、直角三角形の辺の長さを求める基本的な計算方法を身に付けるだけでなく、数学が生活に役立つことなどについて、協働的な学習活動を通して協力して問題解決することのよさや、数学のよさを実感できるようにする。具体的には、「三平方の定理」を生活や他の学習に活用させる場を設定し、協働的な学習活動を取り入れる。協力してよりよい問題解決の方法に気付かせ、定理の有用性を実感させることをねらいとした。

1 単元の目標

観察・操作や実験などの活動を通して見いだした「三平方の定理」を理解し、それを用いて考察することができるようにする。

2 単元の評価規準

数学への 関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	数学的な技能	数量や図形などに ついての知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> 「三平方の定理」に関心をもち、直角三角形の性質を調べようとしている。 正三角形の高さ、弦の長さ、2点間の距離などが、「三平方の定理」を利用して求められることに関心を高め、定理を活用しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 直角三角形の三辺の長さの間に成り立つ関係や、「三平方の定理」を用いて直角三角形のうちの一边の長さを求め、平面図形や空間図形の性質を考えるなど、数学的な見方や考え方を身に付けている。 	<ul style="list-style-type: none"> 「三平方の定理」を用いて直角三角形の辺の長さを求めたり、定理を用いて正三角形の高さ、弦の長さ、2点間の距離、直方体の対角線の長さ、正四角錐の高さを求めたりするなど、技能を身に付けている。 	<ul style="list-style-type: none"> 「三平方の定理」の意味とその逆の意味、平面図形や空間図形における「三平方の定理」が用いられる場面の意味などを理解し、知識を身に付けている。

3 単元の指導計画（全14時間）

時	学習活動（協働的な学習活動）	言語活動のポイント
第1次	第1時 ○観察や操作を通して調べ、「三平方の定理」を見いだす。	<ul style="list-style-type: none"> 式や記号、用語などを用いて自分の考えや思いを、他の生徒に伝えることを通して、自分の考えを深めさせたり広げさせたりする。
	第2時 ○「三平方の定理」を使い、二辺の長さが分かっている直角三角形の残りの辺の長さを求める。	
	第3時 ○「三平方の定理」の逆について知り理解する。	
第2次	第4時 本時 ○スロープの勾配が基準に適しているかどうかを考える。 （日常生活や社会で数学を利用する活動）	<p>協働的な学習活動のポイント</p> <p>他者と話し合う必然性のある課題の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> 自力解決した問題の正誤や解決方法について、よりよい考えを見いだす。 <p>コミュニケーションを深めるための個に応じた指導</p> <ul style="list-style-type: none"> 論理的な説明を苦手とする生徒に、内容が分かりやすく、考えをもてるようなワークシートを用意する。解き方の手順を示し、論理的な説明につながるような構成を心掛ける。 <p>互いの考えを知るための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ICTを活用し、他者はどのように図形を操作したのかなど、互いの考え方の根拠を共有できるようにする。 <p>自己評価を生かした指導と評価の一体化</p> <ul style="list-style-type: none"> 協働的な学習活動での達成度を自己評価させるとともに、教師による評価も行う。自己評価は振り返りと一体化させ「生徒の問いや理解がどう変化するか」が確認できる内容とする。また、この自己評価を通して「学び方を学ぶ」手だてとする。
	第5時 ○直角三角形を見付け、正三角形の高さと面積を求める公式を導く。	
	第6時 ○正三角形の高さと面積を求める公式をさせるようにする。	
	第7時 ○特別な直角三角形の三辺の長さの比について、なぜそうなるのかを考え、理解し、使えるようにする。	
	第8時 ○円の弦の長さや接線の長さを求める。	
	第9時 ○座標平面上の2点間の距離を求める。	
	第10時 ○「三平方の定理」を利用して、数直線上の無理数を表す点の位置を求める方法を考える。	
	第11時 ○直方体の対角線について知り長さを求める。	
	第12時 ○正四角錐の高さ・表面積を求める。	
	第13時 ○基本の確かめ問題	
	第14時 ○章末問題	

4 本時の学習（第4時）

(1) 特に重点を置いた言語活動のポイント

・話し合いを活発に行わせるためには、「自分の考えをもつ」段階で、個々の生徒に自分の考えをしっかりともたせることが大切である。そこで、論理的な説明が苦手な生徒でも、自力解決のときに、自分の考えをもてるような構成のワークシート（解き方の手順を示し、論理的な説明につながるような構成にしたもの）に取り組む活動を設定する。

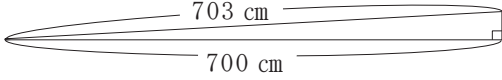
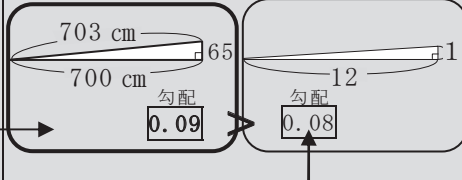
(2) 特に重点を置いた協働的な学習活動のポイント

□ 他者と話し合う必然性のある課題の設定
グループの話し合いを、自力解決後と全体での話し合い後の2回設定する。自力解決後には、自分の考えの妥当性を話し合わせる。解決に至らなかった生徒には、全体での話し合い後に、もう一度グループの話し合いを行わせることで、誤答に対してなぜ間違ったのかを追究させることができる。

(3) ねらい

スロープの図から直角三角形を見だし、既習の「三平方の定理」を活用して課題解決することができる。

(4) 本時の展開

学習過程	学習活動	指導のポイント
課題を把握する	1 本時の課題を把握する。 図のようなスロープは、バリアフリー法の基準を満たしているか考えよう 「バリアフリー法」ではスロープの勾配を屋内では1/12以下にすることとされている。 	
自分の考えをもつ	2 自力解決する。(ワークシートに記入する。) ・勾配 = 垂直距離 ÷ 水平距離	
協働的な学習活動グループ ↓ 全体	3 グループで話し合う。【協働的な学習活動】 ・4～5人のグループを作る。(机配置を变形) ・それぞれ、自分の考え方を説明する。 $C1: 703^2 - 700^2 = x^2$ $x^2 = 494209 - 490000$ $x^2 = 4209$ $x = 64.8768\dots\dots$ よって $x \approx 65$ このスロープの勾配 $65 \text{ (垂直距離)} \div 700 \text{ (水平距離)} \approx 0.09$ バリアフリー法が基準とする勾配 $1 \text{ (垂直距離)} \div 12 \text{ (水平距離)} \approx 0.08$ 	◆自力解決では求めることができなかった生徒は、他者からヒントが得られるようにする。
自分の考えを再構築する	4 課題についてまとめる。 このスロープの勾配 (0.09) は、「バリアフリー法」が基準とする勾配 (0.08) より大きい。だから、基準を満たしていない。	◆他者との話し合いを受けて、もう一度自分の考えを見直させ、ワークシートに「話し合いをして分かったこと」をまとめさせる。
協働的な学習活動グループ	5 適用問題を解く。	
自己の変容などを振り返る	6 話し合いについて自己評価を行い、振り返る。	◆協働的な学習活動の評価項目 (自己評価カード) に記述させる。

検証の成果と課題

◆成果◆

- ・自力解決で自分の考えをもつことができなかった生徒にとって、話し合いはとても有効であった。
- ・受動的な授業ではなく、生徒が主体的に参加する授業となった。

【生徒の反応】

・最初一人で考えたときは分からないことが多くて大変だったけれど、グループの話し合いで分かったことがたくさんあった。友達と意見を交換する中で、答えをよりよいものに近づけることができた。

◆課題◆

・グループの人数を工夫する必要がある。6名のグループ（第1時）と4～5名のグループ（第4時）では、後者の方が活発に話し合う傾向が見られた。
生徒の自己評価が段階に応じて上がった…13.5% 教師の評価が上がった…59.4%
教師の評価も生徒の自己評価も上がった… 8.1% 教師の評価と生徒の自己評価が一致した…21.6%
生徒の協働的な学習活動への意識が高く、第1時から自己評価で高評価（5や4）を付ける生徒が多かったため、第4時での伸びは少なかった。

理科「水溶液の性質」

小学校・第6学年

【本単元の概要】

水溶液の性質や金属などの質的变化について、児童一人一人が問題解決を行う。量的変化と比べて把握しにくい質的变化という事象の問題解決には、他の児童の多様なものの見方や考え方、様々な実験方法による検証結果も合わせて、総合的に考え結論を導き出すようにする。自分の考えを説明したり他の児童の多様な考えを聞いたりして協働的な学習活動を行い、水溶液の性質についての考えを深めるようにする。

1 単元の目標

いろいろな水溶液を使い、その性質や金属を変化させる様子を推論しながら調べ、見いだした問題を計画的に追究する活動を通して、水溶液の性質や働きについての見方や考え方を養う。

2 単元の評価規準

自然事象への関心・意欲・態度	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	自然事象についての知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・ いろいろな水溶液の液性や溶けている物及び金属を変化させる様子に興味・関心をもち、自ら水溶液の性質や働きを調べようとしている。 ・ 水溶液の性質や働きを適用し、身の回りにある水溶液を見直そうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 水溶液の性質や働きについて予想や仮説をもち、推論しながら追究し、表現している。 ・ 水溶液の性質や働きについて、自ら行った実験の結果と予想や仮説を照らし合わせて推論し、自分の考えを表現している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 水溶液の性質を調べる工夫をし、リトマス紙や加熱器具などを適切に使って、安全に実験している。 ・ 水溶液の性質を調べ、その過程や結果を記録している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 水溶液には、酸性、アルカリ性及び中性のものがあることを理解している。 ・ 水溶液には、気体が溶けているものがあることを理解している。 ・ 水溶液には、金属を変化させるものがあることを理解している。

3 単元の指導計画（全 18 時間）

時	学習活動（協働的な学習活動）	言語活動のポイント
第1次	【事象提示】 ○ 5種類の水溶液に、ハーブティーを入れて色が変わる様子を観察し、気が付いたことを話し合う。 ○ 考えた方法で実験を行い、結果をまとめる。 ○ 結果を基に話し合い、5種類の水溶液を見分ける。	・ 根拠に基づいた予想・仮説、観察・実験方法の立案、観察・実験の「結果の予想」（この観察・実験をすれば、どのような結果が得られるはずなのか、という予想のこと）、「結果の予想」と実際の観察・実験結果との比較、考察などの場面で、児童が考えを的確に表現できるよう、記述や話型の定型文を示す。
	【問題】青色ののりの色が無色になる原因を考えよう ○ 児童の予想・仮説を十分に検討し合った後、グループで実験計画を立てる。 ○ グループごとに実験し、結果をまとめる。 ○ 実験結果から考察し、結論を導く。	協働的な学習活動のポイント 他者と話し合う必然性のある課題の設定 ・ 児童が「なぜだろう。」「調べてみたいな。」と思う問題を設定する。 ・ 話し合いが活性化するように、観察・実験の視点を明確にする。
第2次	【問題】炭酸水には、何が溶けているのだろうか ○ 児童の予想・仮説を十分に検討し合った後、グループで実験計画を立てる。 ○ グループごとに実験し、結果をまとめる。 ○ 実験結果から考察し、結論を導く。	コミュニケーションを深めるための個に応じた指導 ・ 個人用やグループ用のホワイトボードを活用し、自分の考えやグループの考えを分かりやすく表して話し合いを行う。
第3次	【問題】塩酸に溶けた金属はどうなったか ○ 児童の予想・仮説を十分に検討し合った後、グループで実験計画を立てる。 ○ グループごとに実験し、結果をまとめる。 ○ 実験結果から考察し、結論を導く。 【問題】蒸発させて出てきた物は、溶かした金属と同じ物なのだろうか ○ 児童の予想・仮説を十分に検討し合った後、グループで実験計画を立てる。 ○ グループごとに実験し、結果をまとめる。 ○ 実験結果から考察し、結論を導く。	互いの考えを知るための工夫 ・ デジタルカメラでの写真や動画の撮影、大型電子黒板、実物投影機の活用などにより、各グループの考えやデータ、考察などを学級全体で共有できるようにする。 自己評価を生かした指導と評価の一体化 ・ 振り返りカードを活用して自己評価を積み重ね、評価の参考にする。

4 本時の学習（第7・8時）

(1) 特に重点を置いた言語活動のポイント

- ・ 根拠に基づいた予想・仮説、観察・実験方法の立案、観察・実験の「結果の予想」、「結果の予想」と実際の観察・実験結果との比較、考察などの場面で、児童が考えを的確に表現できるよう、記述の定型文を示す。
- ・ 児童に話型を示し、「結果の予想と同じだったことは、～です。」や「結果の予想と違ったことは、～です。」のように表現するよう留意させる。


(2) 特に重点を置いた協働的な学習活動のポイント

- 他者と話し合う必然性のある課題の設定
観察・実験の視点に「のりの色が変化する要因」を設定し、その視点を児童に留意させながら実験を計画させる。
- コミュニケーションを深めるための個に応じた指導
児童が根拠のある予想や仮説を立てたことを教師が確認した上で、グループで話し合い、その内容をグループ用の小型のホワイトボードに集約させる。

(3) ねらい

既習事項（リトマス紙やムラサキキャベツの抽出液の色の変化）を用い、のりの色が無色になる仕組みを追究することを通して、水溶液の性質についての理解を深めることができる。〔科学的な思考・表現〕

(4) 本時の展開

学習過程	学習活動	指導のポイント
課題をつかむ	1 時間が経つと無色になる青色ののりについて話し合う。 青色ののりが無色になる原因を考えよう	
自分の考えをもつ	2 原因を考え、予想・仮説を立てる。	◆実際にのりをぬって、色が付くのを確かめさせる。
協働的な学習活動 グループ ↓ 全体	3 児童の予想・仮説を十分に検討し合った後、グループで実験計画を立てる。  4 グループごとに実験し、結果をまとめる。 協働的な学習活動	◆グループで話し合い、グループ用ホワイトボードに考えを集約させる。 ◆のりの色が変化する要因などのように、観察・実験の視点を明確にさせる。
自分の考えを見直す	5 実験結果から考察し、結論を導く。	◆表や図を活用して実験方法を板書で整理する。 ◆グループや学級全体で、予想や仮説と結果とを比較して結論を検討させる。学級全体の結論につなげる。
自己の変容などを振り返る	6 授業内容を振り返り、振り返りカードに記入する。	◆振り返りカードに記入し、自己評価させる。

検証の成果と課題

◆成果◆

- ・ 授業内容を振り返り、継続的に活用することは、協働して問題解決することの重要性を児童に意識付け、児童の思考・判断・表現し、問題解決する能力の高まりに効果があると考えられる。
- ・ 児童の協働的な学習に関する自己評価が、第1時から第7・8時の本時で上昇した割合は、58%であった。児童の自己評価（学級の平均値）の5段階評価は3.5から4.3に上昇した。

協働的な学習の取組により学習の深まりが見られた同一児童の第1時と第7・8時での記述の変容

【第1時】

学級のみならず考えを出し合って、自分のグループには出なかった考えを知ることができてとても楽しかった。



【第7・8時】

他のグループの考えを聞いて、自分たちの考えに生かすことができた。考え直した方法で行った実験は予想どおりにいかなかったけれど、他のグループの考えも聞いていたので、「なぜ青色ののりの色が変化したのか」が分かるようになった。

◆課題◆

- ・ 理科では、問題解決の過程に沿って学習が行われる。児童が見いだした問題の解決に当たり、協働的な学習を「予想・仮説を立てる場面」か「結果から考察し、結論を導き出す場面」のどちらかに重点的に設定する必要がある。

理科「電流とその利用」

中学校・第2学年

【本単元の概要】

電流回路についての観察・実験を通して、電流と電圧との関係及び電流の働きについて理解するとともに、実験機器の操作や実験結果の処理等の技能を習得し、日常生活や社会と関連付けて電流と磁界についての初歩的な見方や考え方を身に付ける。予想や仮説等において、自分の考えを説明したり他の生徒の多様な考えを聞いたりするなどの協働的な学習活動を行い、電流の性質についての考えを深める。

1 単元の目標

- 回路の電流や電圧を測定する実験を行い、回路の各点を流れる電流や各部に加わる電圧についての規則性を見いだす。
- 金属線に加わる電圧と電流を測定する実験を行い、電圧と電流の関係を見いだすとともに金属線には電気抵抗があることを見いだす。

2 単元の評価規準

自然事象への関心・意欲・態度	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	自然事象についての知識・理解
・電流と電圧の関係及び電流の働きに関する事象・現象にすんで関わり、それらを科学的に探究するとともに、事象を日常生活との関わりで見ようとしている。	・電流と電圧の関係及び電流の働きに関する事象・現象の中に問題を見だし、目的意識をもって観察、実験などを行い、事象や結果を分析して解釈し、自らの考えを表現している。	・電流と電圧の関係及び電流の働きに関する事象・現象についての観察、実験の基本操作の実施、結果の記録や整理など、事象を科学的に探究する技能の基礎を身に付けている。	・観察・実験などを通して、電流と電圧の関係及び電流の働きに関する事象・現象についての基本的な概念や原理・法則を理解し、その知識を身に付けている。

3 単元の指導計画（全 15 時間）

時	学習活動（協働的な学習活動）	言語活動のポイント
第1時	○電気回路に関する用語を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・根拠に基づいた予想・仮説、観察・実験方法の立案、観察・実験の「結果の予想」、実際の観察・実験の結果と事前に考えた「結果の予想」との比較、考察などの場面で、自らの考えをワークシートに記述させる。 ・グループ内で、自分の考えを他者に説明してから話し合うように指示する。 ・話し合った内容を基に、再構築した自分の考えをワークシートに記述させる。
第2時	○電気用図記号を用いて回路図を描く。 ○回路図を見て実際に回路を組み立てる。	
第3時 ～ 第5時	○電流の単位と記号について理解する。 ○電流の大きさを測定する実験について、小学校までの知識を活用して仮説を立てる。 ○前時まで学習事項を活用して、直列回路と並列回路の電流がどのような関係になっているか仮説を立て、実験により確かめる。	
第6時 ～ 第8時	○電圧計を用いる実験について、前時までの学習事項を活用して仮説を立てる。 ○直列回路と並列回路の電圧がどのような関係になるか仮説を立て、実験により確かめる。	<p>協働的な学習活動のポイント</p> <p>他者と話し合う必然性のある課題の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合い活動の場面において、ルールや視点を明確に示す。 ・別々に学習した直列回路と並列回路の電流や電圧の特徴を相互に活用する複雑な回路を設定することにより、自分の考えを基に他者と話し合い、課題解決に導くようにする。
第9時	○直列回路と並列回路それぞれにおける電流と電圧について特徴を整理する。 ○家庭の電気配線が、「直列回路」なのか「並列回路」なのかを既習事項から説明する。	<p>コミュニケーションを深めるための個に応じた指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・デジタルカメラや電子黒板、実物投影機などを活用して、グループの考えやデータ、考察などを学級全体で共有できるようにする。
第10時 本時	三つ以上の抵抗や電球を用いた回路の電流と電圧 ○複雑な回路の各部の電流はどのような関係になるか科学的に考え仮説を立てる。 ○電流計を正しく用いて、仮説を実験により検証し、電流の「水流モデル」を用いて説明する。	
第11時	三つ以上の抵抗や電球を用いた回路の電流と電圧 ○複雑な回路の各区間の電圧の関係について仮説を立て、実験により検証する。	<p>自己評価を生かした指導と評価の一体化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・振り返りカードを活用し、本時の達成度を捉えるだけでなく、生徒が次の学習の自分の姿を想像できるようにする。
第12時 ～ 第13時	○回路に加わる電圧を変化させると、電流がどう変化するか仮説を立て、実験により確かめる。 ○「オームの法則」について理解する。	

4 本時の学習（第10時）

(1) 特に重点を置いた言語活動のポイント

- ・本時では、「根拠に基づいた予想」、「予想と実際の観察・実験結果との比較」、「考察」の場面で、自らの考えをワークシートに記入させる。
- ・グループで、自分の考えを他者に説明してから話し合いを行う。
- ・話し合った内容を基に、自分の考えを再構築し、再び文章で書く。

(2) 特に重点を置いた協働的な学習活動のポイント

- 他者と話し合う必然性のある課題の設定
自分の考えを説明してからグループの考えをまとめる。直列回路と並列回路の電流や電圧の特徴などの既習事項を活用して、複雑な回路の電流の大きさについて、自分の考えを基に他者と話し合い、グループの仮説を立てる。

(3) ねらい

- 三つ以上の電球を用いた回路の各点を流れる電流はどのような関係になるか科学的に考え仮説を立てる。
- 電流計を正しく用いて、仮説を実験により検証し、回路の各部の電流の関係を「水流モデル」で表す。

(4) 本時の展開

学習過程	学習活動	指導のポイント
課題を把握する	1 五つの電球を用いた回路図を提示し、本時の課題を確認する。	
	電球が五つある回路の各部に流れる電流の大きさを、水流モデルを使って表そう	
自分の考えをもつ	2 自分で予想・仮説を立てる。 ○前時までの学習事項を活用して、回路の各部の電流の関係を予想する。	◆個人で考えを記入するように促す。 記述する視点を明確にさせる。 (式とその式になる理由)
協働的な学習活動 グループ ↓ 全体	3 協働的な学習活動を行う。 ○各自が立てた予想・仮説を説明し、互いの考えについて話し合い、グループの仮説を立てる。 ○グループの仮説を全体で発表し、学級内で情報を共有する。 ○グループごとに実験し、検証を行う。	◆話し合いに基づいて、グループ内で考えを集約させる。 ◆ICT機器（拡大投影機など）を活用して、グループの考えを学級全体で共有できるように示す。 ◆観察・実験の視点を明確にさせる。
自分の考えを再構築する	4 実験結果から考察する。 ○実験結果から仮説と比較して考察し、個人の結論を導く。 ○個人の結論をグループ内で発表し、互いの考えについて話し合う。 ○各グループの結果を学級内で確認する。 ○複雑な回路においても、「水流モデル」で説明できることを理解する。	◆仮説と比較して考察したことを、「水流モデル」を使って説明できるように指示する。 ◆グループや全体で、結果と仮説とを比べて話し合わせ、学級全体の結論につなげる。
協働的な学習活動 グループ		
自己の変容などを振り返る	5 話し合いについて自己評価を行い、振り返る。	◆振り返りカードに記入させ、自己評価させる。

検証の成果と課題

◆成果◆

- ・自分の考えを表現することが難しい生徒は、グループの他の生徒の説明を聞きながら、少しずつ自分の言葉で記述できるようになった。
- ・自分の考えを表現できる生徒は、他者に説明をすることで学びを深めた。
- ・グループの考えを発表する機会が増え、プレゼンテーションのスキルが向上した。

【一単位時間の生徒の学習感想】

今回の実験の予想などを自分なりに考えて、それをグループの皆と共有することができたことがとてもよかったですと思いました。

- ・授業内容を振り返り、自己評価を継続的に行うことは、自らの学びの成長や他者への関わりについての気付きにつながり、思考・判断・表現し、問題解決する能力の高まりに効果があると考えられる。

【本単元での検証結果】生徒の自己評価が第2時から本時で上昇した生徒は59%だった。生徒の自己評価（学級平均）の5段階評価は、第1時の2.6ポイントから本時では3.7ポイントに上昇した。

◆課題◆

- ・グループで話し合う時間や、発表の時間、振り返りの時間を年間指導計画に適切に設定しておく必要がある。
- ・生徒が自ら解決したいと考え、取り組めるような課題を設定する必要がある。

外国語活動「クイズ大会をしよう What's this?」

小学校・第5学年

【本単元の概要】

本単元は、「What's this? (これは何ですか)」という表現を用いて、他の児童や教師と英語で積極的にコミュニケーションを図ることを目標としている。児童が自然に表現を用いることができるようクイズ大会を設定し、グループでクイズを作り、クイズの内容やヒントの出し方を協力して考え、尋ね合う活動を設定した。クイズ大会に向け話し合う中で、自分の考えと他者の考えを比べながら聞き、複数の考えを取り入れ、よりよい考えをつくり出す協働的な学習を設定した。

1 単元の目標

- 日本語と英語の共通点や相違点から、言語の面白さに気付く。
- 「これは何ですか」と積極的に尋ねたり、問い掛けに答えたりしようとする。
- 「これは何ですか」と尋ねたり、問い掛けに答えたりする表現に慣れ親しむ。

2 単元の評価規準

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
・ある物について積極的にそれが何かと尋ねたり、答えたりしようとしている。	・ある物が何かと尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しんでいる。	・日本語と英語の共通点や相違点を考えることから、言語の面白さに気付いている。

3 単元の指導計画（全4時間）

時	学習活動（協働的な学習活動）	言語活動のポイント
第1時	<ul style="list-style-type: none"> ○野菜や文房具を表す語に慣れ親しむ。 ○「これは何ですか」と尋ねる言い方と答え方を知る。 ○野菜や文房具を表す語を使ったポイントを取るゲームを行う。 ○英語と日本語の違いを比べて気付いたことを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クイズ大会に至るまでに、様々なクイズを通して、本単元の言語材料である“What's this?” “It's ○○.”の表現に慣れ親しませていく。このことにより、言語力を身に付けさせ、自分の思いや考えを言語表現することを学ばせることができるようにする。
第2時	<ul style="list-style-type: none"> ○文房具や生き物を表す語に慣れ親しむ。 ○シルエットカードを使った「シルエットクイズ」を行う。 ○児童同士で、シルエットカードを使った「シルエットクイズ」を行う。 	<p style="text-align: center;">協働的な学習活動のポイント</p> <p>他者と話し合う必然性のある課題の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「クイズ大会をする」という単元を貫く学習のめあてを設定し、よりよいクイズを作るための意欲をもたせる。クイズの内容やヒントの出し方を工夫することを目的として、協力して話し合う必然性が生まれるようにする。
第3時 本時	<ul style="list-style-type: none"> ○生き物や果物を表す語に慣れ親しむ。 ○ブラックボックスクイズ、シルエットクイズを行う。 ○クイズの見本を見ながら、「スリーヒントクイズ」の問題を考える。 	<p>互いの考えを知るための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電子黒板、絵や写真等を使い分かりやすく提示する。児童の興味・関心を引き付け、グループで「スリーヒントクイズ」を作る際に、アイデアを出し合う活動の手助けとなるようにする。
第4時	<ul style="list-style-type: none"> ○グループごとに考えた「スリーヒントクイズ」を出し合う。 ○自分のグループと他のグループを比べて、気付いたことを発表する。 ○「スリーヒントクイズ」をICレコーダーに録音し、聞く。 	

4 本時の学習（第3時）

(1) 特に重点を置いた言語活動のポイント

・本時では単元の言語材料である“What’s this?” “It’s ○○.”の表現に導入部分で親しませる。自分が考えたクイズやヒントを伝え、他者の考えを聞き、話し合うことで、新たなクイズやヒントを作れるようにする。

(2) 特に重点を置いた協働的な学習活動のポイント

□ 話し合う必然性のある課題
他者と話し合う中で、自分の考えと他者の考えとを比較したり、参考にしたりして、よりよいクイズやヒントを作るようにさせる。

(3) ねらい

他者と協力して課題に取り組む活動を通して、自分の考えと他者の考えを比べて聞くことができる。複数の考えを取り入れ、考えを見直したり付け加えたりすることができる。

(4) 本時の展開

学習過程	学習活動	指導のポイント
課題をつかむ	1 挨拶、歌、キーワードゲームを行う。 2 クイズを出したり、答えたりする表現に慣れ親しむ。 3 ブラックボックスクイズ、シルエットクイズを行う。 4 本時のめあてを確認する。	◆電子黒板で使用する言葉を提示したり、音声を出したりして、興味・関心を引き出す。また、尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しませる。
	「これは何ですか」という言い方を用いたクイズの作り方を知り、グループでスリーヒントクイズを考えよう	
自分の考えをもつ	5 クイズの見本を見ながら、一人一人がスリーヒントクイズを作成する。	
協働的な学習活動（グループ）	6 グループでクイズやヒントの内容や出し方を話し合う。	◆クイズの見本を提示し、ヒントの出し方のポイントを伝えた後で、グループでヒントの組み合わせ方や出す順序を考えさせる。
自分の考えを見直す	7 やり取りを練習しながら、内容を修正する。	◆話し合いをしたことで、できたクイズのよさを捉えさせる。
自己の変容などを振り返る	8 話し合いについて自己評価を行い、振り返る。 9 挨拶をする。	◆話し合ったことのよさを振り返るようにする。

検証の成果と課題

◆成果◆

- ・外国語活動では、コミュニケーションを図るための活動を設定することが求められる。クイズを作成することは、意見交換等、協働的な学習を設定しやすく、外国語活動のねらいが達成できる活動である。
- ・協働的な学習活動をする必然性が生まれるので、活動への意欲が高まったり、児童の活動への集中力が高まったりした。
- ・協働的な学習を活動することで、自然と外国語で話す場面が生まれ、結果として外国語に慣れ親しむことができた。

【一単位時間の児童の学習感想】

- ・友達のを参考に、自分で考えてよいスリーヒントクイズを作ることができた。
- ・友達の意見を聞き、それを自分の考えに生かすことができてよかった。

◆課題◆

- ・英語のやり取りによる協働的な学習活動は、児童が使用できる英語の表現が少ないため限定される。グループでの話し合い活動を重視するほど、英語ではなく日本語によるコミュニケーションが多くなるため、できるだけ英語で表現するよう工夫することが必要である。

【本単元での検証結果】 自己評価が段階に応じて上がった児童の割合…38%

教師による評価が以前の単元より上がった児童の割合…68%

外国語「学校のホームページをつくろう」

中学校・第1学年

【本単元の概要】

本単元では、モデル文（まとまりのある文）や表現（単語や文章）の例を参考にして、学校を紹介する英語版のホームページ作成をねらいとしている。また、協働的な学習を通して、他の生徒の考えを知ることにより、自分の考えを膨らませ英語で書くことができるようにする。


1 単元目標

- モデル文を読んで内容を正しく読み取ることができる。
- 自分の学校を紹介する英語版のホームページに掲載する記事を書く。

2 単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・聞き手が理解しやすくなるように工夫して発表している。 ・間違ふことを恐れず紹介文を積極的に書いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の学校について、内容的にまとまりのある紹介文を書くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・語句や表現、文法事項などの知識を活用してモデル文の内容を正しく読み取ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文法を正しく運用する知識を身に付けている。

3 単元の指導計画（全3時間）

時	学習活動（協働的な学習活動）	言語活動のポイント
第1時	<ul style="list-style-type: none"> ○教科用図書のモデル文を読む。 ○モデル文を参考にホームページの原稿を個人用ワークシートに書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・4技能（聞く、話す、読む、書く）を用いた活動を総合的に取り入れる。グループで協力し、ホームページの原稿を書く。さらに、他の生徒の原稿を読み、自分の原稿を改善させる。その後、グループごとに発表させる（話す）とともに、他のグループの発表を聞かせる。
第2時	<ul style="list-style-type: none"> ○モデル文を参考にホームページの原稿を個人用ワークシートに書く。 ○グループでホームページの原稿を考え、発表用のワークシートに書く。 	<p style="text-align: center;">協働的な学習活動のポイント</p> <p>他者と話し合う必然性のある課題の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の学校を紹介するホームページを作成する。グループ内で、各自作成した英文や考えを積極的に取り入れ、協働的な学習活動を行う。
第3時 本時	<ul style="list-style-type: none"> ○発表に向けてグループで練習する。 ○ICT機器を使ってグループで作成したホームページの原稿を全体で発表する。 ○個人で作成した原稿を修正したり、追加したりする。 ○グループ内で、他の人の原稿を読む。 ○再び自分の原稿を修正する。 <div style="text-align: center;">  <p>協働的な学習活動の結果を発表する</p> </div>	<p>コミュニケーションを深めるための個に応じた指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特に配慮を必要とする生徒には、積極的にグループ学習に参加できるようグループ編成を工夫し、役割分担等を明確にする。 <p>互いの考えを知るための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表時に電子黒板を用いて、グループで作成したホームページの作品を提示する。発表で生徒が他のグループの発表を聞くことで、自分の作品を更に改善させる。

4 本時の学習（第3時）

(1) 特に重点を置いた言語活動のポイント

- ・他のグループの発表を聞き、自分の考えなどを英語で書くよう指導する。
- ・他者の文章を読み、意見や質問をして再度見直して、自分の原稿が推稿できるようにする。

(2) 特に重点を置いた協働的な学習活動のポイント

- コミュニケーションを深めるための個に応じた指導
教師がデジタルカメラで原稿を撮影し、電子黒板を活用して発表させる。他のグループの発表を聞くことで自分の作品の改善に役立てるようにさせる。

(3) ねらい

他の生徒の発表を聞いて自らの作文を修正するとともに、今まで学んだ様々な表現を使って自分の学校を紹介する英文を書く。

(4) 本時の展開

学習過程	学習活動			指導のポイント
	第1時	第2時	第3時	
課題を把握する	1 本時の課題を把握する。			◆教科書本文を参考にして書かせる。
	自分たちの学校のホームページを作成しよう			
自分の考えをもつ	2 モデル文を読む。 3 ホームページの原稿を書く。			
協働的な学習活動 グループ ↓ 全体	4 グループごとにホームページの原稿を書く。	5 グループで発表の準備をする。 6 グループで考えた自分たちの学校のホームページについてクラス全体で発表する。		◆グループ内で生徒のよいアイデアを出し合わせる。 ◆生徒の作品をデジタルカメラで撮影して電子黒板に映し、発表させる。 ◆グループの発表から、よかった所や改善すべき所を指摘して、生徒に気付かせるようにする。
自分の考えを再構築する		7 自分の原稿を修正したり、追加したりする。		◆他の生徒の原稿を読ませ、よい所や改善すべき点を指摘させる。
協働的な学習活動 グループ		8 グループで他者のホームページの原稿を読み合い、日本語で意見や質問をする。		
自分の考えを再構築する		9 自分の原稿を推稿する。		
自己の変容などを振り返る		10 話し合いについて自己評価を行い、振り返る。		◆話し合ったことのよさを振り返るようにさせる。

検証の成果と課題

◆成果◆

- 【生徒の感想1】グループの皆で聞き合ったりすることができて、分からないことがまた新たに分かるようになりました。そして、他のグループなどの意見も知って自分の考えが膨らみました。
- 【生徒の感想2】新しいグループと活動したことで自分の考えに生かすことができました。大変だったけれど、終わった後、達成感がとてもありました。

- ・生徒は教え合うことで達成感を味わい、他の生徒の考えを知ることで自分の考えを膨らませていた。
- ・個人で作成した原稿（第1時）と協働的な学習の後の原稿（第3時）を比較すると、文の量が大幅に増え、自分の考えを書くことができた。
- ・全体発表ではICTを活用し、作品を電子黒板に映すことにより、発表する生徒も聞く生徒も集中できた。

◆課題◆

- ・中学校第1学年の初歩的な英語を学習している段階であるため、本単元ではグループの話し合いは日本語で行ったが、今後は英語で行うことが望ましい。
- 【本単元での検証結果】自己評価が段階に応じて上がった生徒の割合は29%、生徒の自己評価（学級平均）は10月時の2.9ポイントから11月（本時）の3.9ポイントに上昇した。

第5 研究の成果と今後の取組

1 研究の成果

小学校・中学校で各教科一単元ずつ検証授業を実施した。成果を研究主題に迫る手だてに沿って記述する。

(1) 他者と話し合う必然性のある課題の設定

話し合いを主体的に進めるために、各教科で課題の内容を吟味し、課題の提示方法を工夫した。児童・生徒が「友達と話したい」、「友達の考えはどうなのかを知りたい」という気持ちをもって話し合いに参加できるようにした。

小学校国語の文学的な文章の指導の場合、一人で読んだときに気付かなかった叙述に着目して一人で読んだときの最初の考えをより確かなものにしたたり、疑問に思ったことを解決したりするために、物語を読んで他者と話し合うこととした。その上で、児童が二つの考えから一つの考えを選択し、同じ考えの児童に理由や根拠を尋ねたり、違う考えの児童にどうしてそう考えたのかを投げ掛けたりする姿が見られた。また、自分の考えを聞いてもらいたい、意見を聞きたい相手を選んで本文の根拠となる箇所を示しながら、自分の考えを話したり、相手の考えを聞いたりする姿が多く見られた。

小学校社会では、児童に問題意識から学習問題を設定させ、調べる際には学習問題に立ち返るようにさせた。また、人の思いや願いについてロールプレイで発表させるようにしたことで、他者の考えが聞きやすくなり、積極的に意見交換をしていた。

小学校理科では、グループ編成を実験別にした上で、話し合いのルールや視点を明確に示し話し合い活動を構成した。自分の考えを説明したり、他の児童の多様な考えを聞いたりして、自分たちで問題を解決する過程を通して、実験方法や考察を吟味した。



解き方の吟味（小学校・算数）

小学校外国語活動や中学校外国語では、コミュニケーションをとる必然性がある活動を取り入れることで、活動への意欲が高まったり、児童・生徒の活動への集中力が高まったりした。

また、活動中に外国語で話す姿が見られ、外国語に慣れ親しむことができたと考えられる。中学校外国語では、グループで学び合うことで達成感を味わうことができ、他者との交流を生かして自分の考えを膨らませることができた。

(2) コミュニケーションを深めるための個に応じた指導の充実

話すことや聞くことが得意な児童・生徒には、もっている力を十分に発揮できる場や役割を、苦手な児童・生徒には協働的な学習活動に参加できる手だてを講じることで、協働的な学習活動の活性化につながった。

小学校算数では、知識・技能の習熟の程度に応じて、グループを編成することとした。また、考えを伝えることにも個人差があるため、話し方を示し、自分の考えが表現できるようにする手だてを講じた。

中学校国語の討論の学習では、自分の意見の根拠を考える学習、相手の反論を予想し討論に役立てる学習をする際に、同意見の生徒で構成する少人数グループを設定した。そのグループの構成員は次時の「討論」の際、作戦会議をする構成員と同じとし、コミュニケーションを深めるための手だてとした。

(3) 互いの考えを知るための工夫

児童・生徒に学習の興味・関心を喚起することは重要であり、個人の考えをまとめたり、グループで意見交換したりするためにICTの活用は有効であると考えられる。本研究では、協働的な学習活動において互いの考えを知るための方法としても活用した。具体的には、電子黒板で学習内容を提示したり、グループでまとめたものを全体協議の場で映したりした。



今までの学習をスクリーンで確認（中学校・社会）

中学校数学では、課題の解決方法を図で示させ、それをスクリーンに映し、どのように図形を操作し考えたかを示して考え方を共有し、個人や全体での思考の確認や整理に役立てた。

中学校外国語では、グループで作成したホームページの原稿を電子黒板に映すことにより、他のグループの考えを知ることができ、生徒自身の考えを深めることにつながった。

(4) 自己評価を生かした指導と評価の一体化

協働的な学習活動を評価するための共通の評価項目（表1参照）を基に、各教科等で適切な振り返りシートを考えた。そして、活動の自己評価を行うだけではなく、自分の学習について振り返る活動を行った。そのことで、教師の評価と児童・生徒自身の評価を合わせ、次の時間の有効な指導を考える教師の手だてとなった。また、児童・生徒は次の時間の自分の目標をもつことができ、自分が学習をどのように進めていくか、どのような目標をもって学習に臨めばよいかを考え、主体的に進める手だてになった。

小学校社会では、評価を四段階とし、自分の考えを見直した後で評価するようにして、自分の学習の様子を丁寧に振り返らせた。また、学習の感想を分析し、児童の理解や思考の傾向を把握することで、次時の導入の仕方や展開の変更にも役立てることができた。

小学校国語、小学校外国語活動では、評価を五段階とし、話を聞く、話すだけではなく、自分の考えを見直すことを重視して評価したことで、自分の考えを見直すことに関して、次の学習への目標を立てることができた。

中学校理科では、自分の学習を振り返るだけではなく、グループや学級全体の話合いの様子も振り返らせたことで、他者への関わりについて意識させることができた。

小学校と中学校を校種別に検証すると、小学校では児童が自分の学習を振り返ることに慣れていないことにより、自己評価を客観的に行うことが難しいことが考えられる。中学校では、今までの経験を生かして客観的に自己評価を行い、ペアやグループの話合いの様子を振り返る記述も多く見られた。

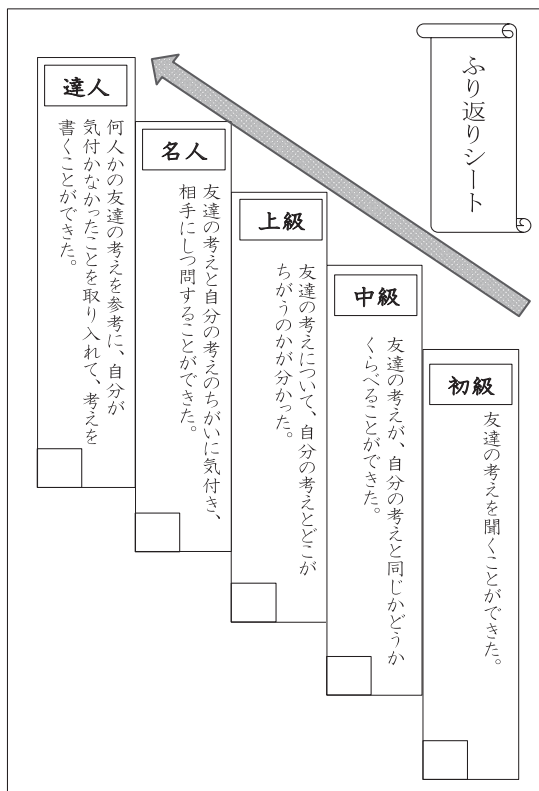
自己評価の際に教師の評価や他者による評価を活用し、本人以外の評価と比較することで自

分の評価の有効性を自分で確認することが重要であると考える。

以上のように、児童・生徒は、同じ目的に向かって互いに協力し合い、課題を解決することで、協働的な学習活動に対して、達成感や充実感を感じることができた。そのことで、児童・生徒間の交流が増え、人間関係が深めることができた。

様々な言語活動や協働的な学習活動は、全教科等で意識的に行っていくことで知識・技能、思考力・判断力・表現力を身に付けることに加え、「人間関係を築く力」を高めることができる。この力を高めることで児童・生徒に、主体的に取り組もうとする意欲や多様性を尊重する態度を身に付けさせる。そして、コミュニケーション力やチームワークを高める力を身に付けさせ、答えのない問題や経験したことのない課題を他者と協働して取り組む力を育てることができると考える。

(振り返りシート例)



小学校国語の例

<自己評価カード> Grade 学年 Class 組 Name 名前
()-() ()

今日の外国語活動の学習を振り返りましょう。

スリーヒントクイズの活動をして、「友達と協力して課題に取り組むこと」について、あなたはどんな学習をしましたか。

番号	学びの内容
⑤	自分の考えと友達の考えを比べながら聞き、友達の考えを取り入れ、さらによりよい考えをつくり出すことができた。
④	自分の考えと友達の考えを比べて聞き、似ているところ、違うところなどに気づき、相手に意見や感想を伝えることができた。
③	自分の考えと友達の考えを比べて聞き、似ているところ、違うところが何か気づくことができた。
②	友達の思いや考えを聞き、自分の思いや考えを伝えることができた。
①	友達の思いや考えを最後まで聞き、理解することができた。

左の「学びの内容」中で、もっともあなたが学んだことに近いと思う、「学びの内容」の番号を下の口の中に書いてください。

スリーヒントクイズの活動をした感想
 新たに知ったことがありますか。 相手や場に応じて話することができましたか。
 友達と上手に活動することができましたか。

小学校外国語活動の例

「青山士と荒川」話し合い活動 ふりかえりカード 名前()

	S	A	B	C
自分の評価	自分の考えと友達のを比べて聞き、にているところやちがうところに気付き、意見や質問をしている。	自分の考えと比べて友達のを聞き、どこまで同じかが分かっている。	自分の考えと友達のを比べて聞いている。	友達の発表を最後まで聞くことができた。

今日の(ぼく・わたし)は、S・A・B・Cのどれでしたか？

月 日()	月 日()	月 日()	月 日()	月 日()	月 日()
今日の自分は S・A・B・C	今日の自分は S・A・B・C	今日の自分は S・A・B・C	今日の自分は S・A・B・C	今日の自分は S・A・B・C	今日の自分は S・A・B・C
できたこと	できたこと	できたこと	できたこと	できたこと	できたこと
次回がんばりたいこと	次回がんばりたいこと	次回がんばりたいこと	次回がんばりたいこと	次回がんばりたいこと	次回がんばりたいこと
そのために…	そのために…	そのために…	そのために…	そのために…	そのために…

小学校社会の例

理科 協働的な学習活動自己評価シート(詳細版)

学年	2年	之	組	番号	番	氏名
----	----	---	---	----	---	----

習得番号	学習内容	指導開始日
-		年 月 日()

[1] 自分自身の考えをみんなに発表することができたか。(SS～Cのいずれかに○)

観点/レベル	SS	S	A	B	C
協働的な学習活動の評価項目	今まで学習したことを基に自分の考えをまとめ、学級全体の課題解決につながる意見を発表することができた。	今まで学習したことを基に自分の考えをまとめ、グループの考えを深める意見を発表することができた。	自分の考えをクラス全体やグループを越えて発言することができた。	自分の考えをグループ内で発言することができた。	自分の考えをグループ内で発言することができなかった。

[2] グループの人やクラス全体で学習を深めることができたか。(SS～Cのいずれかに○)

観点/レベル	SS	S	A	B	C
協働的な学習活動の評価項目	自分の考えと友達の考えを比べながら聞き、複数の考えを取り入れ、よりよい考えを作ることができた。	自分の考えと友達の考えを比べて聞き、類似点や相違点に気付き、相手に意見や質問をすることができた。	自分の考えと比べて友達の考えを聞き、どこまで同じなのかを分かることができた。	自分の考えと友達の考えを比べて聞くことができた。	友達の考えの発表を最後まで聞くことができた。

[3] 今回の学び合いを通じて楽しかったことや深まったこと

中学校理科の例

本日の授業を振り返って

平成 26 年 11 月 11 日 (火)

3年()組()番 氏名()

※本日の授業中に行った、話し合い活動中、または前で説明をした友達の考えをきいて、**最もあてはまるところ1つに○をつけましょう。**

	自分の考えと友達の考えを比べながら聞き、複数の考えを取り入れ、よりよい考えを作ろうとした。
	自分の考えと友達の考えを比べて聞き、類似点や相違点に気付き、相手に意見や質問をした。
	自分の考えと比べて友達の考えを聞き、どこまで同じかが分かるようにした。
	自分の考えと友達の考えを比べて聞くようにした。
	友達の発表を最後まで聞くことができた。

中学校数学の例

2 今後の取組

(1) 研究成果の普及・啓発

研究成果の普及・啓発するために次の取組を行っていく。

- ・研究の成果を研究紀要及び指導資料にまとめ、各学校等に配布し、授業改善に役立てる。
- ・東京都教職員研修センターの研修において研究内容を踏まえた研修を実施する。
- ・都教委訪問等で、研究内容を踏まえた指導・助言を行い、学校での指導改善を図る。
- ・東京都教職員研修センターで実施する夏季集中講座や研究発表会、各種研修において、研究内容の普及を図る。
- ・調査委員が、教職員研修センターにおける各研修における講師を行うほか、各地域での普及・啓発を図り、教科の指導の改善に資するようにする。

(2) 来年度以降の研究への反映

今年度の研究内容を来年度以降の教職員研修センターにおける研究に生かす。

○ 参考文献・資料等

- ・「小学校学習指導要領」 文部科学省 平成20年3月告示
- ・「中学校学習指導要領」 文部科学省 平成20年3月告示
- ・「高等学校学習指導要領」 文部科学省 平成21年3月告示
- ・「小学校学習指導要領解説」（総則、国語、社会、算数、理科、生活、音楽、図画工作、家庭、体育、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動） 文部科学省 平成20年8月
- ・「中学校学習指導要領解説」（総則、国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術・家庭、外国語、道徳、総合的な学習の時間、特別活動） 文部科学省 平成20年9月
- ・生徒指導提要 文部科学省 平成22年3月
- ・「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」（小学校・中学校） 国立教育政策研究所 平成23年11月
- ・「適正で信頼される評価の推進に向けて」 東京都教育庁指導部 平成23年11月
- ・「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」 国立教育政策研究所 平成25年3月
- ・「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会－論点整理－」 文部科学省 平成26年3月
- ・「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方（諮問）」 文部科学省 平成26年11月
- ・平成22年度東京都教職員研修センター紀要第10号 平成23年3月
- ・平成23年度東京都教職員研修センター紀要第11号 平成24年3月

等